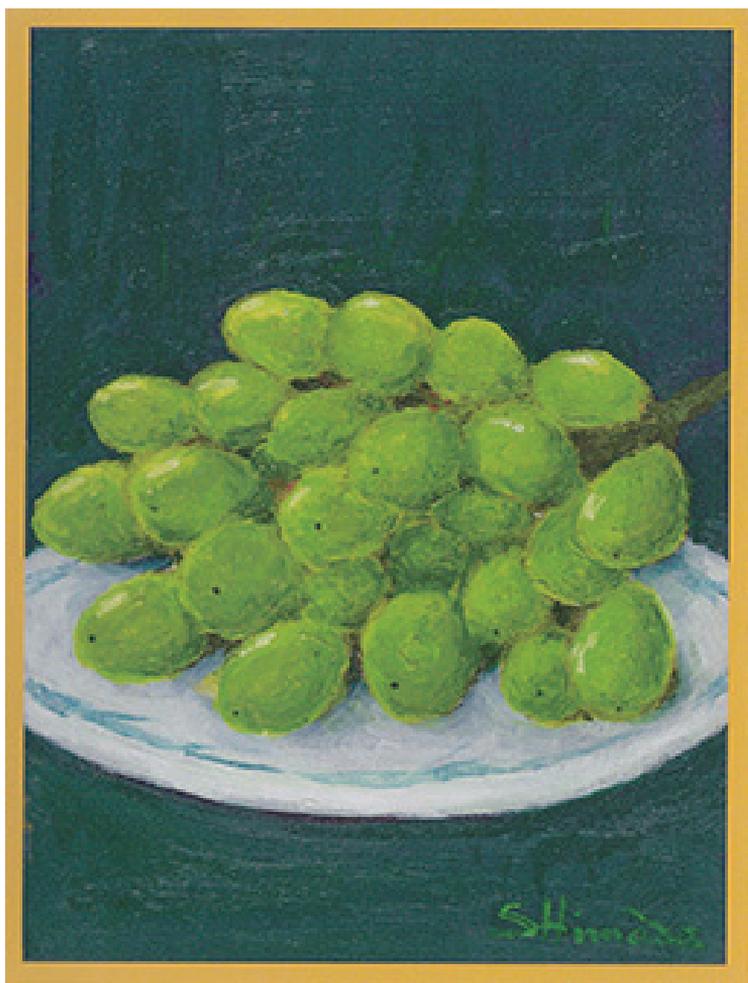


冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二六年四月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十五卷第四号（通卷七七〇号）

4月号・2026年

応接室……新作五首

わがまま

萩原千也



新聞を牛乳をやめ遣り繰りす我が介助では妻
は暮らせず

旨いではないかと最初たひらげし冷凍食に我
儘のわく

二度三度食べて確かめスイッチ切る麺を茹で
るも難しからず

「咲き誇る」といふ表現の稚拙さを説くアラ
ラギを納得せりき

歩みつつ一首まとめて人の居ぬ田の道に入り
録音したり

〈新アララギ所屬〉

2026年4月 目次

〈応接室……新作五首〉……………萩原千也

冬雷集…………… 1

作品一……………18

四月集……………34

作品二……………44

作品三……………52

二月号冬雷集評……………桜井美保子…17

二月号作品一評……………小林芳枝・藤田夏見…33

二月集評……………鈴木やよい…38

二月号十首選（冬雷集・二月集）……………39

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 補記……………大山敏夫…40

二月号作品二評……………井上菅子・江波戸愛子…42

二月号十首選（作品一・作品二・作品三）……………57

二月号作品三評……………山本三男・橘 美千代…58

歌集 / 歌書御礼……………編集室・佐藤靖子…60

冬雷集

大山敏 夫 埼玉

厳格に守りたるものか締切日の三日前ながら歌の稿届く

締切日ぎりぎり粘るわれなどは到底近づけず萩原氏の日に

掛くる眼鏡のうちに鮮明に眼見え「目力」といふ光を感じず

何でもない証明写真のやうながら眼鏡の奥の眼球がんきゅうぎらぎら

力強く働きてきばき処理しゆく日常を思はず君が写真は

訃報ひとつまた一つ吾に舞ひこめど意欲隆隆の写真に刺激あり

君の近影フォトショップに微調整しつつおのづからむきあふその眼光に

締切日に眠らず書き纏めし原稿類さういふことはせずすでに老身

赤間洋子 東京

食ひしん坊の我紅玉りんご安ければ煮詰めてジャムにす甘さ控へて

チョコレートもう一つ欲しと手を伸ばす独り暮らしの気ままなる夜

スーパールに行きて求める恵方巻き目移りしつつ短きものを

幼にも老いたる我にも平等の暮らし望みて投票をする

期日前投票に行くたび思ひ出す安倍総理大臣撃たれしことを

目覚めたら思ひがけなく雪降りて投票率の低下を憂ふ
日本初の女性総理誕生すこれからの日本如何に進むや

兼 目 久 栃木

よしやるぞの気概を持ちて新年の神棚に酒をあげつつ祈る
屋根の上に止まりし雪は屋根をゆるがし落ちさうに見ゆ
すつばさも夏みかんの汁に出てゐるよ我が作りし夏みかんジュース
19年間雨は降らずの天候は富士山の姿くつきり映す
子供の頃母が作りししもつかれを記憶に残る八十年前
鮭の頭と生野菜をやはらかく煮ることによりうまみを出せり
大根を細かく下ろすのがわがつとめ鬼下ろし器で小さく下ろす
海のなき県民にとり鮭頭を煮ることにより蛋白質を出せり
しもつかれ他県の人は食はずなり男女うまいと近間の中年

森 藤 ふ み 東京

真向ひの工場二階のタンク下カラスの頭ちよこちよこ動く
朝の五時天気は如何にとカーテンを細めに引けば外は雪なり
七時過ぎ粉雪となり強風にあふられ降りきて垣根に積もる
雪積もる垣根の中に餌を探し移動してゆく一羽の雀
ステンレスの物干し竿に止まりたる雀三羽のすぐに飛び立つ
福寿草と書かれ小さき札の立ち黄の花びらのわづかに覗く

置き時計壁掛け時計の時を同じに止まりてしまふ

妹ヤエコ

櫻 井 一 江 東京

介護度の進めど常に寄り添ひて「ヤエコはいつも明るいから」と
何事も「おとうさん」頼りの妻抱へ愛情溢るる会話続けて
入院を拒み居宅の看護ケア態勢整ひ医師の訪問有りと
緊急の病院ベッドに握手せし二時間前のヤエコの温もり
午年の節分前日この世にて息継ぎ止めし妹ヤエコ
四人の子九人の孫に恵まれし妹に賛辞の働きのさま
孫子らに敬愛されぬし妹の生き方堂々炙り出されつ
創業の事業継がせし長男の発展喜ぶヤエコでありき
自立して料理洗濯できるまで見届けし妻の旅立ちと喪主

有 泉 泰 子 山梨

南天の赤き実そつと口にする空青く澄み春のきたるか
沈丁花椿のつぼみとふくらみぬ子等の受験の頃のなつかし
買物より帰宅し玄関あけたればドレミファ夫のピアノひく音
あたたかい日ざしに誘はれ久しぶり川沿ひ歩く山々を背に
行きは富士帰りは甲斐駒にみとれつつ川岸歩くや半年ぶりなり
夜おそく飼ひ猫の死を伝へ来る娘の悲しみ子をなくす母
子宝に恵まれぬまま捨て猫を育てきし娘の哀しみいかに

青木初子 神奈川

節分を過ぎて朝の陽高くなり庭面に待ちたる直射光届く
朝の陽にどれ程力あるならん日当り良き苗育ちの早し
朝日より西日長けれど葉と花蕾大きくならずブロッコリーは
木斛剪り薄日ながらも日の射して山茶花の葉の緑濃くなる
昨年の暑さに残りし水仙の小さき球根芽の出の悪し
プランターに花芽を持たぬ水仙の葉のみの育つ三つ四つと
ばらばらと芽のでる水仙ひと所に集めて育てん秋までに大きく

中村晴美 茨城

年越しの熟成進むさつまいも炊飯器に入れ簡単に旨し
通販にて冷凍トラフグ取り寄せぬアラのみなれどおじやは旨し
庭の井戸汲めども続く濁り水あめ不足か地震の予兆か
水道水浄水するもカビ臭し雨不足にて初の事なり
雪予報スタッドレスのタイヤとす心に余裕楽しみでもあり
五センチの雪に警報の大騒ぎ周りのくるま皆ノーマルタイヤ
レアアース南鳥島に希望あり他国に頼るリスク回避か

吉田綾子☆ 茨城

雨の日なく日々の雨乞いに雪となる早も積り来庭の芝生に
久しぶり雪に被わるる巡りなり庭のおもむき一夜に変わる

屋根の雪つららとなりて朝光にきらりきらめき軒先かざる
山椿の葉群の揺れに弾かれる残雪散り来細雪のごと
連日の乾燥注意報に気の病みぬ古き我が家の隙間目立ちく
降る雪に思いの馳せる幼友雨に雪の日裸足で登校

橋本文子 鳥取

この先によい世の中を見つけてかどの候補者も笑顔のポスター
投票日大雪予報を皆が知り期日前投票する列長し
市役所の窓口全て閉ざされてほの暗き廊下に人々と並ぶ
立春をこの目で見んと訪ね行く大山ふもとの尾高城跡
大雪がとける陽ざしに花開く紅白の梅二本が並ぶ
晴天に梅の梢を見上げれば青空の中真白の大山

山口 嵩 福島

年明けの労ひかねて訪ねたる墓入る前の友と別れに
急逝の友の霊前香たけばしばらくよぎる山行と議論
二次会を終へて連れ立つ友の家はづむ話に夫人はせはし
飲みすぎてつい泊まりたる友のもと乳房ちかづきはつと目覚めぬ
青空を背に蠟梅の黄はすがし行きつ戻りつカメラの五人
蠟梅のあと追ふやうに木蓮の蕾ふくらみ寒も薄らぐ
この秋は「豊作だよ」と告ぐるやう乱るる風に枝ふる満作

高松 美智子☆ 栃木

富士そびえ赤城は晴れて男体に雲かかりいる大寒の朝
首元に厚きマフラーぐるぐると素足の少女が自転車で過ぐ
スカイツリーと一緒に指切りす七歳の子とのふたりの冒険
陽に干した布団を敷きて休ませる初めてひとりでわが家に泊まる子
少年囁むチューインガムの青リンゴあたりに甘酸っぱき香りひろがる
母国の旗高く掲げて入場するウクライナ選手団へのひとときの歓声
安全が最優先の施設のなか転ぶな良く噛め過保護な視線

高橋 説子 栃木

花の名の出でず明日まで検索を我慢せんけふは立春だから
立春を過ぎてこの冬初めて雪景色なるわが庭に遭ふ
ハート型に胸を染め抜き湯気たてるほどなる春の初めの日ざし
柀に似たトゲトゲのこの葉なら鬼も嫌がる笹トリカブト
明けやらぬ住宅街をバス停に歩けば過度に街灯のあり
海を恋ふあまりに島国日本の中の五島へ海越えて来ぬ
空を飛び船に揺られて家離るわれの「遠くへ行きたい病」
目も覚める青空のなか風のなか友の葬儀の寒さひとしほ
嫌ふ人ある彼岸花の細き葉は地にこんもりと濃く冬を越す

酒向 陸江☆ 東京

正月の天満宮の梅林の白梅早も開花の兆し

若者の多き参拝の列たのもし寒さ忘れて後に着きたり
列に並ぶだっこされたる幼児と目があいにしげし “いないいないバー” する
風強き一夜明けたる門口に学校の松の大き枝落つ
マツボックリ三つ付きたる枝拾い赤いバラ添え壺に挿したり
友の手の力強さと温かさただありがたくしみじみうれし
車窓より見ゆるは雪国美しく満員電車に旅する心地す

天野 克彦 大阪

冬日ざしあまねく丘の坂の道つらつら列なる早咲き椿
幹太き影をふみゆく雪の朝冬芽ふくらむ桜の通り
照り翳り存分に生き桜木は古い木となりて苔をまとへり
日の当たる石のぼりゆく冬の蜂生死の境さまよふごとし
翅たたみ草にとりつく冬の蝶触れんとすれば落ちてしまへり
生き残り衰へ動く蠅螂は手を持って触れれど鎌をもたげず
夜となり生駒山なみ消え失せて峰の鉄塔ひかりを放つ
床に臥し逝きにし友のだれかれと言葉を交はし寝ねんとすなり

大塚 亮子 東京

冬の陽に蕾膨らむ白梅の咲くを待ちをり二月に入りて
植ゑくれし父思ひつつ白梅をひと枝切りて茶の床に挿す

蹲の水は凍らずこの冬は雀の時をり水飲みしてをり
ふる里の大雪テレビに映されて空き家となりたる生家を案ず
積もる雪に開け閉てできぬ家中の戸障子すべて閉めずにおかむ
雪下ろし頼めど職人不足にてなかなか来てはもらへぬ不安
二階まで積もれる雪に日の射さず朝から電気点して暮らす
母編みし靴下手袋身に着けてマントを纏ひ集団登校
上級生に挟まれ雪道三十分辛かりし思ひ出今は懐かし

早緑

嶋田正之 埼玉

断水の心配少なきこの土地に暮らせる幸に感謝をせねば
渇水のダム映像うつさるる嘗て集落ありし痕跡
この日照り長く続けば穴埋めに大型豪雨の襲ひ来るかも
鉢植多の薔薇に小さな赤芽見ゆ今年も見事な大輪頼む
音のなく残り時間の減りゆける庭の蠟梅朝陽に透けて
庭隅の木下に今年数を増す早緑柔き路の臺見ゆ
公園の枯芝の中ほつほつと銀色おぶる蓬の新芽
今朝もまた番のキジバト枯芝の中歩みつつ我を無視して
降雨量少なく畑の土乾き道辺に光る霜柱見ず

江波戸愛 子☆ 埼玉

プリムラのようにやく開いた花も葉も食べてしまいいぬ鳥の寄り来て

求めたる花ことごとく食べられて娘の買いたる防鳥グッズ

銀色に光を放つ梟を娘の吊るす二階のベランダ

剣山を並べたような猫よけを求めて娘の防鳥対策

一月の庭の明るさ地に枝に積もれる雪を眩しく見つむ

衆議院選挙の日なり積もる雪踏みしめながら投票所まで

投票を終えて町会会館へ「ニコニコクラブ」初会に参加す

同年と年上多く年下は少なし「ニコニコクラブ」の会は

橘 美千代 新潟

雪やみてにはか差しくる冬の日の眩しすぎるも疲れた脳に

電子カルテのコード入力マスターせむ脳と手の回路つくとキー打つ

コード覚え打ち込むわれと一覽を作り選ぶ夫やり方それぞれ(処方入力

思考停止は脳のフリーズ状態かぬき紅茶とチョコにて解除

電子カルテどこに何があるか解らぬはドラクエのゲームのやうと嘯く

羊雲うかび澄みわたるウクライナの空の下どこかにロシアの砲撃

奪はむとするものの残虐果てしなしかつて先住民ネイティブに対しアメリカも

絶え間なく火山灰のごとふりそそぐ雪は地上にかさを増しゆく

再発を医師つげくるも補聴器を忘れた母に聞こえぬらしも

ブレイクあずさ☆ カナダ

領事館の窓の向こうに冬の海そのまたはるか向こうに日本

離れて祖国を思うひと並ぶ平日の朝の在外投票
人の列長くも声はひっそりと在外選挙人証手に手に
手荷物と身分証明差し出して受け取る薄き三枚の紙
太く書くゆつくりと書く反戦と国民主権を叫ぶ党の名
日本での最後の居住地奈良市へと運ばれてゆくわれの一票
リベラルを打ち壊す人の声高し放つ言葉はからっぽなれど
アメリカの痛みを今さら思い知る不実なる人日本に立ちて
アメリカの行く道暗しそれを追う哀しき日本の行く道暗し

中 村 哲 也 宮城

時々痛みを感じる右膝の所以は如何にと病院へ行く
常用の内服薬の服用が未だ無き事医師に褒めらる
レントゲン二枚眺めて医師の云ふ膝の痛みは加齢の故と
右膝の痛みを示す画像かな骨に有りたる僅かな突起
内服と塗りの薬の痛み止め併用しつつ日々送りたる
赤信号車に気を付け警官が歩道を走る何事なるか
二月にも十度を越ゆる空模様日傘差したる女性もゐたり

野 村 灑 子 千葉

窓から煙を見むと製鉄所の白く巻き上る正月の煙見る（川崎製鉄）
川鉄の工場より立ちのぼるロールパンの如く渦巻くかたまりの煙

近くの病室より大声で「父ちゃん」と呼びかける声す明け近づくに
筍、きんとん、煮豆等ならぶ折箱の病院の元旦食にことほぎのあり
橙色の大きな屋根を指さしてその隣の我が家を説明したり
病室よりはるか房総の低き山々を越えきて明るき新年の光
睡眠導入剤効きそむるころ看護師の息してゐるか顔を近づけて去る

田 端 五百子 岩手

鈴緒ふり平穏祈りて紙コップの甘酒吹きつつ賑はふ境内
頻り降る牡丹雪吸ふ海の面を今し昇れる初日輝く
七草を過ぎてナヅナの袋詰めただの雑草見向きもされず
日課とす散歩時雨に端折りたり「これ幸ひ」と二度寝むさぼる
小面を彫りぬし伯父の作業場に匍うづまる削り華の中
空つ風五葉峰より吹き下ろす最強の寒波に過疎地は凍ゆ
「老骨の虫干しなり」と日向ぼっこ何時ものメンバー縁に居並ぶ

飯 嶋 久 子 ☆ 茨城

数カ月一滴の雨も降らぬ故水道水は異臭こもれり
那珂川の流れとり入れ水道水に浄化進まぬ日照りの日々
ふるさとの日光大谷川の流れよりとる水道水の美味なつかしき
近き小川に白鳥の群れありときき万歩計つけ野道をいそぐ
きのう今日姿見せぬとがっくりと帰りき万歩計6000歩を越ゆ

友よりの快気祝いせんのメールあり合わせるに難き三人の予定
自分の脚で歩けることのしあわせを胸にいだきて歩道橋登る

飯塚澄子 東京

二月号一月下旬に到着す卓上の「冬雷」表紙絵素敵
一粒ごと心躍らすマスカット深緑のバック趣添へる
足指の間の洗ひ快し上がりの拭き取り天にも昇る気す
風邪の母案じ押上に帰らずに「不忍家」に土日を過ごす曾孫ら
五時過ぎの帰宅後少し休みをりチョコ頂戴と曾孫近づく
小三の男子の曾孫の好きなもの冷蔵庫から持たせ二階へ行かす

鈴木 やよい 東京

花瓶にて年を越したる百合の花最後の蕾がおほらかに開く
気に入りて仕舞ひし器もこのへんで日々に使はむ先を思へば
ソファーにて寝入る夫に延々と売込み続けるテレビショッピング
法螺貝と読経が響き群衆はみな前を向き豆まきを待つ
雪の朝乗りたる電車は立往生ぬき座席に感謝し本読む
雪をのせ咲きある花に近寄りて心の弾む寒桜なり
身のすくむ高さを一気に滑り降りる選手の胸に恐怖のありや

山本 三男☆ 群馬

雨降らぬ日々が続きて散歩路に見る川更に水位の下がる

スーパーのドアから外に出でたれば吹き荒れる風の冷たさに遭う
自動車に乗り込みドアを締めたれば外吹く風はここに届かず
手のひらでカップをつつみゆらゆらと湯気なのぼれるコーヒーを飲む
雪降れば地表すれすれ群れて飛ぶ雀の激しき動き目にする
長靴で歩く夜明けの雪の道数名通りし足跡のあり
雪積もる朝の散歩路いつも見るカラスの群は今日は見られず
雪降りて水かさ増えたる川中に鴨らは群れてしきりに泳ぐ

江藤 ひさ子 大分

欠詠は絶対罰と前向くも歌稿の提出またもぎりぎり
締め切りに後押しされて月々の作歌に励む吾の幾年
揺れ動くシャッターの音に目覚めたり薄暗き庭に小雪舞ひ舞ふ
気遣ひて「雪はどうね」と埼玉の長男からのメールが届く
「ちらちらと降つてゐるけど大丈夫よ」と声に返しぬその即刻
「シャンプーを貸して」と隣に駆け込めばすぐに呉れたり「返さないで良い」と
わが貸家にて五十年を住む隣とは親戚の如き交流

戸部田 とくえ 福岡

目の覚めて見回す部屋の親しみに今朝はしみじみ安らげり
強風にあふられ車庫の絶えまなく不快な音に待たるる夜明け
かつを菜のうまみ増せるつくづくと霜に育くむ味に思へり

カレンダーの猫の写真の背の丸さ親しみ深くうれしくなれり
人の世のご縁尊ぶある時は彼方の恵みに天を仰ぎぬ
数々のご著書賜るそのご縁芹沢光治良先生うやまふ
髪かざり思はぬ品を夫よりみやげに貰ふつつしみ礼を

稲津孝子 福岡

庭に咲く花切りてきて水仙の匂ひいつぱいの母の命日
着信に夫の名あり見つからぬ我の携帯さがしたるため
サンタクロース絶対みると学校でひとり主張しきとぞ娘は

「去年今年貫く棒の如きもの」母が歌会に推挙せし虚子

ウルトラマンの形の鉄の塊を包みて今年も煮る黒き豆

三箇日我と暮らせる幼子の雪降る町に帰りてゆけり

車にて国境越ゆればスイスにて鹿肉のシュニツェル食ひき夫と

赤煉瓦の大学の建物より夫が出でてきたるを見し事のあり

大学入試センター試験は寒かりき試験官の夫も受験生の娘も

姉川素枝子 福岡

つはぶきの咲きてをらむかカーテンを開けて見下ろす目のゆき処

霜月の終はり黄葉せぬ木樹の如何なる春を迎ふるならむ

黄葉せず枯れて散りたる櫟の葉車に舞ひて路肩に積もる

春雨といひ秋雨と習ひきし季なく熊の人食ふといふ

冬桜さくと人いひ目を細めアイスクリーム食ぶ霜月

暑さ去らぬ幹より下がる二つ三つ十月桜といへる白色

冷房を暖房に変へ加湿器の間歇眠りよひくるを待つ

良寛の諦念のありドクターのエンド・ステージ吾の心の臓

早くより身辺整理試みて心の有り所に迷ふ現身

井上菅子 山形

大切に命を守る数の子の薄膜を剥ぐ罪にならずや

元日の朝のテレビを一人観て一人で笑ふ今年も独り

昨日と同じテレビコマーション聞きながら今日も平和と明日の米とぐ

解体工事の破壊音の聞こえぬ日破壊はいづこの街に行きたる

われに最も縁なき株価値情報を流すテレビと外の面の吹雪

春の芽吹きが恋しく百円均一に緑の毛糸三玉を買ふ

斬合ひの小説次々おもしろく読みたる後を凝る首と肩

わが事のやうに喜びわが事のやうに怒りし友よ懐かし

タオル斜めに干して忙しき一日を四角に畳み仕切り直しぬ

井上榎子 新潟

年毎に薄くなりたる生命線賀状にアピール跳ぬる馬描く

血糖値は気分とリンクすると言ひチョコを絶やさぬ娘に慣らふ

新機種スマホの操作に難航し機嫌機棲に娘に頼る

都合よく折り合ひつけるわれにして四角四面の夫訝しの目
 同級の友との再会出向く日は化粧念入り弱音は置きゆく
 吹雪く日の犬の散歩か自動車に乗りて綱引く人に驚く
 警報級の今季の除雪を頼めども受けぬ業者の多きとぞ聞く
 慣れぬ者集めきたるか雪下ろし大屋根に滑る音と悲鳴と
 温もると聞きて飲みたる湯上りの梅酒意外に楽しみとなる

●転載歌「うた新聞」二月月号より

舞を見る

桜井美保子(冬 電)

「船弁慶」平知盛を演じ舞ふ若き役者の隈取りの顔
 荒波よりの出でて義経沈めむと薙刀ふるふ舞の激しさ
 義経と弁慶の姿あらねども心に見てをり舞手は一人
 怨念といふものあると物語脈脈として伝へ来りぬ
 聞き覚えある長唄のひと節が響きて老年の脳を刺激す

歌会のお知らせ

小誌としての本部歌会は休会中である。現在行われているのは、会員の皆様がお住まいの近くで集まって行う小規模の勉強会が幾つかある。
 昨年四月に始まった「川越歌会」は川越市在住の方を中心に、近場の沿線にお住まいの方が集まって月一回土曜日に開いている。実績では七人〜十人ほど集まる。
 ●四月の「川越歌会」は、十八日(土)の13時〜16時半まで。
 JR・東上線「川越」西口より五〇〇メートル。
 ウェスタ「川越」2階 第4会議室
 連絡先 安川敏子 (90-4608-7265)
 野崎礼子 (90-9971-8149)

二月月号 冬雷集評

桜井 美保子

以前より大きくなりて葛重の「耕書堂」
 跡地の案内板の輝き 櫻井一江
 大河ドラマで注目された影響によるのか、江戸の出版人、葛屋重三郎の店跡の案内板が立派になっていようだ。「以前より」とあるので過去に何度も見かけているのだろう。地元日本橋を愛する心が歌の根底にあると思う。

成人になりたる孫の晴れ姿しみじみ眺む少し離れて 吉田綾子☆

お孫さんの小さかった時のことを思い出しながら成人した晴れ姿を見つめている。心から嬉しい日なのである。「少し離れて」に眩しいようにお孫さんを見る作者の心情が伝わってくる。

施設にて百歳祝はれ叔母嬉々と日赤當時を記者に語りぬ 山口 嵩

健康で明らかに話が出来る百歳の叔母君は作者の心の支えでもあるだろう。百歳の祝いの日ということで記者も駆けつ

けた。日赤で働いておられた当時を語る叔母君の顔は輝いていたに違いない。
 一番安いメニューは珈琲二五〇〇円目をむき頼む帝国ホテルロビーに

高橋説子

一流ホテルの喫茶なら値段が高いのは予想できる。と言っても二五〇〇円のコーヒーは庶民の感覚からすると驚くほど値が高い。「目をむき頼む」がいかにも人間的で面白い。こんな時は落ち着いて優雅な気分を飲んでみようか。
 並木道歩くは散歩のコースにて昨日は早足今日はのんびり 江波戸愛子☆

この歌だけで鑑賞すると、歩く速さを日によって変化をつけているとも読めるが、一連の歌から一人の時は早足で、久々にご主人と散歩の時はのんびりと歩くというところらしい。単純化が効いた表現で読者もゆったりとした気分になる。

チヨコレート最後の一片分けあいて歩きだしたり再びわれらは

ブレイクあずさ☆

「八重山にて」と題する旅の一連から

の一首。急な雨に遭い、ずぶ濡れで歩いたという。なんとなく心にあるわだかまりのようなものもいつしか消え、チヨコレートを分け合った。二人の心が通い合う。「再び」に心の変化が読み取れる。

葉を落ともしひしめく枝々頭にし公孫樹は新たな力をみせる 鈴木やよい
 黄金色に輝く葉を落とした後の公孫樹は幹と枝が頭になる。きつぱりとした冬の樹木の姿である。「新たな力を見せる」に個性的な捉え方があり魅力的だ。
 丁寧な皺を延ばしてポケットに仕舞ひこみたり負の感情は 田端五百子

皺を伸ばしてポケットに入れたのは紙幣ではなく負の感情。つまり目に見える感情をポケットに仕舞い込んだ。そして作者は気持を切り替えたのだろうか。
 洗濯物を干さむと階段のぼる都度「大丈夫」と声掛けくる夫 江藤ひさ子

洗濯物を干すのは日常欠かせない家事の一つ。作者が階段をのぼる時に怪我をしないように夫君は声を掛けてくれる。その優しさが歌に出ている。

作品一

桜 井 美保子 神奈川

伊豆急の下田の駅の改札口駅員に手渡す踊り子号の切符
団体の旅では寄れぬ小き店「お寒い中を」と挨拶を受く
むかひあふわれらの卓に運ばるる石臼挽きの細き手打ち蕎麦
暖房のそれほど効かぬ店内に熱き蕎麦にて身の温まる
リュック背に来れる伊豆の了仙寺冷ゆる空気に包まるる庭
日米の和親条約ゆかりの寺歴史を偲べと白梅匂ふ
黒船に開国したる映像をシアターに見る足を休めて
境内のミュージアムに残るお吉の下駄鼻緒も台も朽ちかけてをり

正 田 フミエ☆ 栃木

定植のエンドウ飛ばされ萎えており西風強く一日吹きて
西風に吹きつけられて定植のエンドウ全滅根張りの弱し
物置のジャガイモ見れば発芽して太く長い芽小さまざま
ジャガイモの保存にシート掛けたるが発芽原因か呆然とする
収穫の三箱全て発芽したジャガイモ芽欠き半日かけて

芽欠きしたジャガイモ茹でて熱々に塩やバターをつけて食みたり
新年の畑に来れば野菜たち少し凍りて輝いている
年明けて野菜作りを思うとき栽培本を見つつ書き出す

斉 藤 トミ子☆ 栃木

アクセルとブレーキ間違う事故あまた自分がまさかその当事者に
ブレーキを踏む勢いにアクセルを踏んでしまいぬバックしながら
駐車場の棚を倒して止まりたり車大怪我われは無傷で
警察と保険会社に電話して事故対応ができたる安堵
早朝の事故対応のおまわりさん孫に似る眼の優しき物言い
事故起こし風邪に臥したる新年を嘆いていけば友は励ます
新年は立春からと歌の友大きな声出し豆を撒くなり

浜 田 はるみ☆ 埼玉

昭和の見事な歌詞に眼が止まり唄われ続ける理由を知りぬ
息子の正月休み九日も最終日には短く感じる
カルチャーの廊下展終え初めて観賞者のアンケート読む
絵を眺め作者のあれこれ伝わりと感想読みて意外な驚き
連日の殺人事件や山火事に身勝手さを思う昨今
侵略したウクライナの地いち早く徹底的にロシア化して行く
ウクライナの捕虜を前戦に置くというむごたらしさを全て隠して

田 中 祐 子 ☆ 埼玉

真冬とは思えぬ縁に陽は満ちて椅子をヨイシヨと「冬雷」に親しむ
ガラス戸に添うカーテンの汚れ無し息子ふたりの大掃除極む

朝食に欠かさず添える納豆の小粒の旨味頬膨らませ食む

大鍋に大豆を茹でる若き日の母の揺らぎ無き姿勢の記憶

一昼夜かけて作りし納豆の粘りと母の笑顔の朝食

母の歳遥かに越えてなお慕う武士の家系と自慢せしひと

倉 浪 ゆ み 埼玉

箏曲の「春の海」を想ひだすたをやかに弾く祖母を思ほゆ

願ふこと恙なくあれと夫と我堤に立ちて初日をろがむ

施設にて迎ふる新春いかなりや弟に出す寒の便りを

サツカーのゴールを守る逝きし子は夢の中にてはじける笑顔

どこ迄も青く高いこの空のはるか先にはミサイルとび交う

ふつくらと小豆粥は炊きあがり厨に漂ふかぐはしき香りは

紅梅と白梅ひと寄りそひて氏神の庭に春はきませり

諸葛菜小さき丸い葉顔を出しもうすぐ春と告げてゐるやう

林 美智子 ☆ 東京

あと五日で百歳なりし姑の想い出溢る十三回忌

麻布十番のお寺もお経も清々し姑は明朗闊達なりき

残された短い時間を良く生きよ天から声す読経に混ざりて

今朝見れば夫の頬がふつくと法事の意義を我に説くなり

公園の柳の枝が薄茶から緑がかりて春が近づく

松 中 賀 代 ☆ 高知

列をたて横断歩道を渡り行く小学生は右手を上げて

わずかずつ日足も伸びて紅梅の蒼ふくらみ一輪が咲く

白鷺が杉の梢に点々と日暮れに白く浮き立ちて見ゆ

暖かい日差しはあれど肌寒く凍える指で新聞をとる

玄関を開ければ真っ白雪景色只々静かに春雪が降る

伊 澤 直 子 ☆ 東京

大寒に公園の紅白梅は咲き蠟梅も香るそこは早春

陶板で再現したるシスティーナ礼拝堂本物見たかに圧倒される(大塚美術館)

「モナリザ」や「ゲルニカ」「ヒマワリ」陶板にて本物のように引きつけるものあり

高松よりフェリーで四十分直島の宮浦港に上陸をする

直島の須田悦弘の「雑草」を見て須田作品に関心を持つ(ベネッセミュージアム)

直島は島をあげてアート作品二泊三日でも飽きることなく

直島は十六年ぶり変わらずにゆったりアートを見せてくれたり

本 郷 歌 子 ☆ 栃木

猪に急ブレーキの音響く深夜の三叢山に胸撫で下ろす

我が影の庭に映りてくつきりと寒気の中に満月に浮かぶ
露天風呂に明るき午後の日を浴びて肩まで浸かる大寒の日
赤城嵐は狂う如くに庭馳けて蠟梅の香消えてしまいいぬ
間断なく腱板断裂の痛みく羽ばたく鳥を窓越しに見る
父の死は病みたる祖父を直撃す祖父身罷りぬ一月の後
十センチ積もりたる雪の呆気なく雪晴れの庭にパンジー揺れる
次第次第に焼色らしき色となり食べ頃だねと餃子の縫いぐるみ

村 上 美 江 岩手

救急車使はず来たりてトリアージに病の母と順番を待つ
九十八歳きゅうじゅうはちとなりたる義母は受診して即入院す検査結果に
手術しても手術しなくてもそれぞれに高齢者ゆゑのリスクの高し
急性の病の義母の手術なり治療同意の結論難し

義母の持つ元気の底力ドクターも信じて勧める病の治療
ドクターの判断と技術有り難し内視鏡にて「石」取り除く
真冬日の身を切る思ひどれ程に解つてゐるか反応いまいち
大寒に退院となる義母の足カモシカの様片手で掴めて

乾 義 江☆ 茨城

独居するわが家に孫夫婦の訪ひくれば家内に自然と若さみちくる
子沢山の嫁御の姉のファミリーと二日の夜のひとときの宴

送りくれたる息子夫婦と立ち寄りし鹿島神宮は人込みのなか
そこかしこ庭に鈴生りの柑橘類朝日を浴びて花の如しよ
人生行路歩みて百年横浜の義姉は電話に声量豊か
義姉祝い表敬訪問と思えども老いて行き来の自信も無くて
窓に見る葉も無き梅の枝振りを日毎眺めて春を待ちおり
日没後の西空見れば夕明り日暮れて東に満月さやか

永 光 徳 子☆ 東京

立春を迎えた朝の陽光にバンジーの鉢の冬囲い外す
庭隅の手入れ届かぬ荒地には自生の水仙群落を成す
雪の朝吸い込まれそうな静寂感雪間に覗く万両の赤
咲き初める梅に重たき春の雪樹のエネルギーに滴り落ちる
雪解けの地面は黒く甦り春の足音そここにあり
身近なる友次々と見送りて余生と言う字の重さ増しいぬ

保留音

松 本 英 夫 東京

靴下のやはやはやはと積まれあて二人の今日は無事に終はりぬ
かにかくに悩めることの多き日は熱き湯に入り洗ひ流さん
旧友に電話をすれば「次は俺・」代はりに来たり喪中のはがき
マンションに移り住みきて二十年となりの幼は世を生き初めぬ
保留音「人の望みの喜びよ」歯科の予約に癒されてをり

食卓の横にありしが捨て去りしソファアに肘つきまろびかけたり
吾が生は無限軌道のボルダリング登らむとして落ちおちては登る
照明の紐スイッチをやめたるによるめきながら虚空つかめり

中 島 千加子 東京

珈琲の香にきみのみる安らかき固き蒼のほぐれてゆかむ

大 塚 照 美 兵庫

箱根駅伝の往路のアンカー仰天のトップに出でつ余裕の継走
戸締りと火の用心が大切とふわれに届けらる介護認定

要介護の認定下がるも受け止めてみづからのため励みあるのみ
霧出でてゐるらし狭き海峡に船の警笛やまざる夜明け

買ひ替へても二槽にこだはる洗濯機をいまだ使ふと笑ふ孫の友
それぞれの孫への年玉おくり来てスロースローとゆつくり帰路は

大寒の豫報の風の吹き荒れて眼科を休む頼れず杖は
軽がもの親子を見むと行く池の風さむきなか親のみ動く

三 好 規 子 福岡

施設そばに航空自衛隊の基地ありて時折りラッパの音が響きぬ

パトカーやガードマン立ち人多し春日基地六十周年祭とふ

スタッフの揃へる演奏は初といふハンドベルに合はせ歌ふクリスマスソング
施設長がサンタクロースの衣裳にて一人ひとりに配るプレゼント

年末にインフルエンザの患者いで年越しそばも元旦も孤食

スタッフ以外たれにも会へぬ元日に次男より菓子のお荷の届く

正月二日の雪の豫報に長男よりホテルの食事を延期の電話

霜月に農業高校のバザーにて買ひしシクラメン新年も咲ふ

須 藤 紀 子 埼玉

雪残る庭に雀と鴨が代はるがはるに餌を求めくる

電柱の上に一羽の鴉きて四方に呼べど答へはあらず

搗き立ての白米二キロ購ひてそのぬくもりを暫し抱きをり

この国の民の慣らひか八十年過ぎてまた見る集団悪夢

あの時が節目だったと後の世に人の嘆くを暗く思へり

血を流す覚悟を持つと人の言う己は流すつもりもなく

愛するは国にはあらず地のうへに生きるすべてを愛すと今言ふ

佐 藤 靖 子 東京

冷えしるく水の出でざる箱根にて民の言ひたり寝耳に水と

葬儀社のコマーションソングの心地よき調べにのつていつしよに唄ふ

墓石に石灯籠に雪つらら兄の忌日に何か降りくる

花びらの千枚あまり蓮の花われのひと世のあまりにちさし

金網に常に咲きゐる朝顔に万が一にも変化なからむ

自閉症と記憶喪失失神等定番なるよ韓国ドラマ

俳優のパクボゴム君チョンイー君ウォレスチョン君覚えたる幸
文人の「ぶ」の点点に及ばざる人ゐて田端に住むとし言ひつ

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

庭のバラ富士の景色の話して顔見知り増ゆ散歩のおまけ
富士山の話に続く歌の会知りて翌月仲間となりぬ
町内の安全パトロールに誘はれて緑のチョッキ着けてもらひぬ
新品の緑のチョッキと黄の帽子つけて巡りぬ街の果てまで
町内を巡れば梅の盛るころある家の梅あを白く咲く
道にでて庭木の落ち葉を掃く女性自ら言へり百歳なりと
自づから生ひ立ち語る百歳の女性の背筋まつすぐのまま
伊予柑とデコポン不知火その違ひ先づ友は言ふ皮の剥きやすさ

鈴 木 計 子 東京

かはせみを見たりし川に水のなく乾く石みて過ぐる元日
福笑ひの眉置くやうに浮かぶ雲目鼻に口をつけてみようか
雪になるやもしれぬとの空晴れて正月明けの川べりをゆく
散り敷ける林の落葉の色失せて広がる枯れ色音させ蹴りゆく
敷地より出でしと言へる奈良朝の須恵器が置かる今宵の宿は
あちこちに絵皿の染焼飾る宿絵付の出来るコーナーのあり
飾らるる宿の絵皿の染焼のあの皿この皿知る名の多し

宿を発つ時に見送るスタッフがまめでと言ひて豆菓子くるる

石 渡 静 夫 茨城

将門の愛妾眠る桔梗塚国道沿いの生垣の中
生垣に囲まれ三畳ほどの土地五輪の塔と石がごろごろ
筑波山と小貝の流れ望む地に高井城跡鳥の声のみ
寒風をもものともせずに若者はひとり熱唱す駅前広場
一両の竜ヶ崎線警笛を鳴らして進む吹雪の中を
早朝の吹雪のホームに駅員は融雪剤を丁寧撒く
降り続く雪は歩道を埋め尽くし微かに残る足跡を辿る
降り続く雨に心は潤ひて見るものすべて吾に優しく

西 村 邦 子 兵庫

あの朝が二胡の音色によみがへる震災メモリアルコンサート
成人式終へたばかりの振袖が和箏筒倒れて下敷きになりき
震災を知る振袖なれど華やかに震災知らぬ孫の袖ふる
幼きころ親子で出会ひし観察会夏の星空冬の星空
出会ひたる織姫彦星十五歳写真の二人の笑顔は青春
一枚の絵画の前に立ち止まる「天草の入江」三岸節子展
高台の鳥居にながむ天草のゴシック様式崎津教会
独特な歴史と街並み天草の崎津集落のんびり歩く

植松 千恵子☆ 静岡

久しぶり変わらないねと挨拶す互いに婆ばにママ友だった人
収集車正月のゴミ膨大で加重包装も原因の一端

我何して過ごして来たか一芸に秀でた趣味の人羨まし

十二月もう芽を出すチューリップこれから酷寒地中にいて欲し

病院で幼ながスマホを操るをこれ善き事かと違和感があり

鏡餅仏前神棚供えるが今年は小さめもち米高騰

年末に切り抜き貼りたるレシピ出しおせち作りぬ伊達巻腕上げ

波乱含みの上海 その2 永野 雅子☆ 東京

上海の旧市街地の町並みは古きと新しきが共生しており

土産物の店立ち並ぶ一角はかつての賑わいを彷彿させる

入れ物のイラスト気に入りクリームを幾つか選ぶ土産物一号

買い物後集合場所待の間暑さが気になり室内に逃げる

二番目の観光場所に着くやいなや倦怠感で椅子に倒れ込む

出発よと声掛けられて立ち上がるが気持ちが悪くホテルに帰る

部屋に着きベッドで横になる頃は熱が上がりて朦朧となる

比較的健康体の我なれば一年の内発熱するは極稀なり

川上 美智子☆ 高知

冬ざれを健気に咲き継ぐ芝桜ピンクの際立つ公園の花壇

氷点下の朝を凌いだ花びらに裂けて千切れた傷跡の有り

鍋用の骨取り切り身は高値付く地元スーパーの鮮魚売り場に

「いとよりのすり身で充分」顔馴染みの店員近付き耳元に囁く

東山望むホテルの窓に寄り初日の出待つ京都の元日

稜線に立ち上がる光煌々と日の出に合掌七時二十分

鴨川の川面を照らす日が昇り古都を迎える新しき年

川俣 美治子☆ 栃木

仕事なき日々も週末待ち遠し土曜ランチに気合いを入れる

立ち止まり空仰ぐ夫独り言「春を感じる」立春近し

今年また豆まく声の小さくて鬼の耳には届いただろうか

窓ぎわで一人ランチを楽しみて外の景色に春混じりおり

小さくも芽が出たボケをながむればくれし亡き人の笑顔が浮かぶ

気に入りの指輪はめればいつしかに緩みのいでてくるりと回る

雪予報空を見上げて気萎えする明日にしようこたつ出られず

大野 茜 神奈川

黄に染まる銀杏並木の大通りぎんなん避けて右へ左へ

大箱に真つ赤な林檎ぎつしりと秋の便りと義妹のメモ

ゴム手袋はめて柚子の実を三十余するどき刺にこはごはもぎ取る

柚子の樹の葉陰につはぶき黄の花を見つけてぽつと心明るむ

単線の一両電車で揺られる出雲の国は低き山並み
借景の山々いまだに紅葉なくも絵画の如き美術館の庭
冷えきつた体育館にステップを半ばも過ぎればベストも要らぬ

小林貞子 山形

われ逝かば汝はこの雪如何にせむ米寿の夫の深き溜息
鬼殿よ節分祭は十六夜の月を愛でつつ酒を酌まむか
世の義理に囚はれをりし若き頃付合ひは減りわれら老いたり
椿山荘に祝ひし婚の写し絵の輝き褪せぬ白無垢の妹
亡き妹と長き年月住みし家義弟は小庭に声を殺せり
雪雲に紛れて白き鳥一羽時の川は凍りてをらむ
ロボットはスマホの指令に返事して律儀に励む絨毯掃除
偶に今日授かりたる青空を天の褒美と濯ぎ物干す

本間 志津子 山形

とよもして一夜吹きたる夜の明けは屋根も地面も一面の白
大寒と共に訪ひくる大寒波白きトンネル出口の見えず
暮れ早き吹雪の空を群れをなし渡り鳥ゆく西を指して
山の端に薄紅の光あり今日は晴るるか買物日和か
日の光あまねく満ちて今日の晴れ思はず帽子買ひてしまへり
誰がための国会解散総選挙かこの寒空に人の忙しきに

クレヨンに鬼の面描く少年よ節分近し外は吹雪くも

高橋 燿 子☆ 埼玉

猫グラを夫婦で作る奥信濃雪の暮らしは冬の暮らしと
顔寄せて雪の中に日の出見るシェアハウスに住む仲間ら六人
出張のついでと孫が訪ねくるじいじに会えてただ嬉しいと
座布団を枕に眠る孫娘その母に似るクセも仕草も
泊まろうかな犬を抱きしめぬくもりの心地よさをあやかはいいたり
バス停の時間を見たる若人は歩くと決めて駅へと向かう
右に揺れ左に揺れてニコちゃんマークリュックの上より笑顔振りまく
午後になれば夢見る様にとけた雪山や畑に白さ残して

野崎 礼 子☆ 埼玉

一万歩重ねし日々の一年は列島縦断の道のりよ
伊能忠敬日十里歩み測りしを我はアプリの地図にて辿る
古地図をアプリに辿る鹿児島路鰻思いつつ鰻焼く夜
床下に寝かせし味噌の二年経ち蓋を開くやキュンと香り立つ
塩控え翹たつぷり味噌の味信州みそに劣らぬ出来よ
年月は味に深みと旨味添え味噌を舐めつつ人も又然り
すいすいと駅の階段駆け上がる今日は川越歌会の日なり
外科の医師減りたると聞く地方にて兄の手術予定たたぬまま

眠れない夜に眠れる音楽といふを聴き
をり面白からず
桜井美保子
眠れない夜は私なども度々あるが自然
に任せているうちに何とか睡眠はとれて
いるようだ。眠れる音楽というものを聴
きながら眠ろうという積極的な姿勢の背
景には忙しい日常があるのかもしれない。
い。ゆっくり眠れたらどうか。

一粒の種から育苗したるレタス大きく
育ちその葉を食みぬ 正田フミエ☆
種を蒔き苗を育てて立派になったレタ
スには格別な思いがあるだろう。大切に
育ててきたから感じられる味を楽しむ気
持が結句から伝わってくる。

アザレアは留守の間を守られて枯れず
に長く花を保ちぬ 松中賀代☆

アザレアは日本のヤマツツジなどが海
外で品種改良された西洋ツツジ。八重咲
きで大輪の華やかな花が咲く。退院して
無事に咲いている花を見る喜びと支えて

くれた家族への感謝。

残り飯まけば雀の数多来て啄み始む霜
置く庭に 須藤紀子

この歌を読みながら浮かんでくる風景
の温かさは作者の心の温かさでもある。
一時の糧を得て元気に生きてゆける雀の
喜びがみえるようだ。結句「霜置く庭に」
が背景をうまく伝えている。余談だが私
の住む集合住宅などでは禁止されている
行為であることが少し寂しい。

蔵の街を流れる川に魚棲みて立ち止ま
るたび口開け近づく 石渡静夫
人が来ると食べ物頂けることを魚た
ちは承知していて寄って来る。この町の
人々の温かさは観光にきた人にも伝わっ
ているのだろう。

犬を飼ふ子供ら三人それぞれの子の教
育に似る育て方 西村邦子

犬にも本来の性格はあるのだろうが家
族になった人達に馴染んでゆくのだら
う。それぞれの家庭の違いが犬の行動か
ら見えてくるという発見が楽しい。
十日夜の月は夕べの中天に土星と並び

黄に輝きぬ

小林貞子

十日夜は旧暦十月十日（二〇二五年は
十一月二十九日）に収穫を祝い、田の神に

感謝するという日だという。農作業の縮
め括りでもあるのだろう。この歌の後に
大根の収穫をするという歌もあり、空の
様子に合せて働き、感謝をする気持が今
も生きていることが嬉しくなってくる。
異常な気象が続かないように願いたい。

急に止み又激しさをくりかへす冬へ向
かふか霜月の雨 本間志津子
安定しない空の様子を見ながら冬の近
づくのを感じ取っているのだろう。雪に
覆われる日々を思いながら冬を案じる気
持がみえる。

冬陽浴びデンマークカクタスほころび
ぬ一時の美を窓辺に楽しむ

野崎礼子☆

咲き始めた花を見ながら「一時の美」
と心を抑える背景には、先の事は分か
らないという厳しい現実がある。同じ思
いをした者として作者の心に共感する。今
の一時を大切にして楽しんで欲しい。

見舞いにと長女くれたる『国語便覧』
どこから見ようか気力湧き来る

桜井美保子
国語便覧をお見舞いにとは素敵なセ
クトですね。長引いた風邪その最中にあ
った夫の誕生日には娘さんの手作りの料
理の歌もあり、二人の娘御の両親を思
う心が伝わる。

コロっとは元気でなければ逝けないと
友との会話最後に何時も

齊藤トミ子☆
友と会いたわれないおしゃべりの後に
はこういう会話が日常となつた。友との
時間は有限であることをお互いに惜しみ
つつ明るく前向きに生きている歌。

薄らと霜のかかりていじらしき百日草
の帰り咲く庭 田中祐子☆

夏の初めから咲き続ける百日草。作者
は何度か切り戻しをされたのだろうか。
霜のかかって尚咲く花への愛着。

津波に吞まれむとするわが家の直前の
写真がテレビに映る 岩淵綾子

淡々と歌われた。私もその時はテレビ
の前において、驚きながら見ていました。
作者の当事者としてのこの十五年の年月
は様々な現実にも会い感情の反芻の繰り
返しに苦しみ抜かれたことでしょう。十
五年過ぎた今、津波がわが家を呑みこむ
映像を事実として受け止める一首の歌。

重き実の赤く色付き艶増せばリングマ
すますわれ丈夫にす 村上美江

林檎の美しさと重量感が伝わり作者の
健康な喜びが気持ちのよい一首。
この腕に何回注射を刺しけむとインフ
ルエンザの予防接種受く

乾 義江☆
インフルエンザの予防接種を年毎に受
けてこられた。腕に刺した注射針の回数
はどれくらいか。痛みは言わない。

我が家にも防犯カメラ設置する独り居
案ずる娘の提案 永光徳子☆
遠くに住む子供達は高齢の親を心配す
るもの、ましてやひとり暮らしの作者に

娘さん達の思いは一人だろう。以前には
毎日交わされるLINEの歌もあったが、
防犯カメラは現実的ですね。

座長なる仲代達矢氏の見納めは劇場に
ての「リチャード三世」 大塚照美
最晩年の仲代達矢のリチャード三世を
劇場で生で見られた満足感を歌われた。
重厚な演技だったに違いない。半世紀前
の地方の劇場で同じ演目を観たことを思
い出させてもらえました。

側溝に光がすべり落ちたのは蜥蜴だつ
たらう八月の謎 佐藤靖子

側溝にさつと光が滑り落ちるのが見え
た。あれは蜥蜴だったのかしらと。あれ
これ思う作者。私は美しいブルーの虹色
の日本蜥蜴（幼年期）を想像するのです。
結句の八月の謎にいたく惹かれます。

稲刈りを待つ黄金田のまだ多し盤越西
線十月の窓 鈴木計子

十月の黄金田はまさに稲刈りの直前。
まだ見ぬ磐越西線を地図上で見ながらこ
の歌に旅情をくすぐられます。

四月集

益坂順子 福岡

わが町にこの年初の雪舞ひて人通りなく妙にしづまる
粉雪の舞ふ国道をスーパ―ヘザック背負ひてけふの運動
誰ひとり歩く人なき国道をひたすら歩む背すぢ伸ばして
水不足教へてくるる鉢の花に話しかけたり赤のシクラメン
曾孫の訪ひ来る朝のかすかなる音の気配に耳そばたつる
公園に設置されたる滑り台に休むを知らぬ一歳半は
訪ふことの久しぶりなる動物園に紗来と遊びぬ時間をかけて
吾の言葉理解するらし曾孫紗来の行動早く意思通ひたり

児玉孝 子☆愛知

正月過ぎほっとし居れば微熱あり掛り付け医はインフルエンザと
予防接種の御蔭か症状軽くすみ寝込むことなく回復したり
寒に入り庭の鮮やかな寒椿咲き継ぐ花を選び瓶にさす
簡単な独りの夕餉におでん鍋今日は大寒ゆっくり煮込む
手術してテリボン注射続けおり骨密度の値見事に上がる

寒き夜の入浴剤のうすみどり体沈めて温もるひととき
濯ぎ物干しおれば頭上を鴉とぶ厚き翼を大きく煽りて
セニアカーは歩く人よりやや早し前行く人を追い越して行く

小嶋知葉☆茨城

一月は五四四回目の歌会なり歴史は続く四十五年
会員は十三名とさびしいがことばの希求熱くなりゆく
年始め歌会に続き食事会そしてカラオケみんなで歌う
冬眠のような日々週一度コーラスに行き脳活性す
指導者の澄みたる歌声心地よく楽譜追いつつ挑む新曲
流れゆく伴奏の響きに誘われ四曲歌い疲れを覚ゆ
コーラスのあとのランチとトークにも生きる喜び三時間ほど

津田美知子 岩手

生前の母の洋服捨てられず一枚残さず仕舞ひ込みたり
北国の風はちくちく頬を刺し背中丸めて遠き春待つ
厳寒に新聞配達する人あり吾はぬくぬくと炬燵にて聞く
唐突に「おめでたうがんす」朝一番吾が誕生日忘れず夫は
「ばば今日で何歳なの」と言ふ男孫「ずつとずつと長生きしてね」と
決定戦に吾の推す力士優勝す笑顔の奥の努力に拍手す
病ひゆるゑノンカフェインの夫なれど許しを得たり珈琲一杯

高藤 朱 美☆ 茨城

新年の初買物は七草セットこれより始まる今年の支出
晴天が続きて窓辺のハイビスカス次々咲きて冬を忘るる
寒空に満開となるさざんかに霜よけそつと夕にかけたり
幼きより来れば忽ち踊る孫体柔らか誰に似たやら
卒業を控えて舞台に立つ女孫「エルサ」を歌い演技し踊る
巡礼の一番礼所をテレビに見る訪ねし徳島懐かしうれし

松崎 みき子 岩手

赤と白の南天の実に積る雪午後には溶けて小さき実ひかる
川面に姿写して白鳥は「クウクウ」と鳴き一列となる
北海の空渡り来る白鳥はしなやかな羽広げてみせる
小豆煮て黍だんご茹で一服す外は木枯し椀に湯気立つ
手ぬぐひの姐さん被りしてみたり黍粉こねる亡き祖母真似て
早業の解散選挙期日前投票済ませ寒さに備へる
集落の冬はひつそり暮れてゆく畑も凍みて春を待つのみ

塚 本 節 子☆ 茨城

冬雷の表紙絵に映えるシャインマスカット絵よりこぼれて甘き香りす
孫たちの好物なりきシャインマスカット皿ごと抱きたる小さき手愛し
市役所の玄関前のならせ餅紅白花のごとく揺れおり

肝臓病にて四十の坂を超えられぬと言われし叔父は今年白寿に
二階の六部屋空きて叔父たちは一階にて足りる日々を暮らせり
柿好きの叔父と叔母なり庭先に三種の柿の木五本を植えて
次郎柿富有柿蜂屋柿実りたる季節の子等の笑顔の尽きず

首 藤 文 江☆ 埼玉

鯛焼きの膝に伝わる暖かさ寒風逃れ電車にゆられて
見つめ居る印象派の美術展癒されるままじつと佇む
寒空の風の冷たき大寒に喉に沁み入るコーヒーの味
氷点下ここえる朝のウォーキング手はかじかんで思うままに動かず
帰宅してぬくもり残る部屋の中一息ついてレモンティーを飲む

金 子 八重子☆ 千葉

じゃがいもの芽の毒深くえぐり取る次のポテサラ春になったら
歴代の総理に無かった笑顔にはグッドボタンを連打してます
脳トレのアプリゲームを夜中まで負けず嫌いの自分まだ居る
神様を一人占めした初詣七日の朝の境内にひとり
寒風にハツユキカズラは色褪せて斑入りの新芽の待ち遠しかり
ハイタツチおまけにハグして帰る孫幸せホルモンあふれ出てくる
手をぎゅつと握り返して病床の姉は少しの笑みをくれたり
姉の句を読み返しつつ細枝に貼り付く雪を飽きずに見ている

(☆印は新仮名遣い希望者です)

間違へて炊きたる三合仏へも大盛りとなる今日のお供は 梶尾栄子
間違えていつもより多めに炊いてしまったお米。仏様へのお供えも今日は大盛りだ。何気ない日常にある微笑ましい情景。心が和む。

久々の休みはひと日一人にてカップラーメン作りて食べぬ 山崎 猛☆
忙しい日々なのだろう、久々の休日。「カップラーメン」が、一人でのんびり過ごす状況をよく表している。こういう日も貴重かも知れない。

海上を真つ赤に染めて日が昇る鳴門の海も渦も穏やか 高藤朱美☆
鳴門の海というとすぐ激しい渦を思う。しかしいつも渦巻いているわけではない。激しさの合間の穏やかな海。その海を真つ赤に染めて日が昇る。心を奪われているのではないだろうか。

あと一つ何処に在るのと探す兄の四十 須藤 紀子
二月号 十首選

冬雷集 須藤 紀子
もの読めばこころに沁みる言葉あり老いて知りたるあらたなことは 天野 克彦
忘れみたるふる里訛りの口ついて出で来る幼馴染に会ひて 大塚 亮子
また犬と暮らしたいなと言う君の声聞き流し 江波戸愛子☆
並木を歩く 橋 美千代
ああ雪の降りてあるのか暗き朝静まりかへり 楠 美千代
空気が凍てつく ブレイクあざさ☆
南国の天気は優しとつぶやきぬ氷と雪の育みし君 中村 哲也
荒涼としたる我が家のバルコニー山に見立てる石一つ置く 稲田 正康
あすなろと呼ぶる樹の名いたまじと思ひたること今も思へり 山本 三男☆
予想屋のまなこ鋭し人間の哀しき心底知りいような 稲津 孝子
どこまでもどこまでも遠く行きたしと思ふ十月秋明菊咲く 焼夷弾に大村燃ゆる火あかあかと海に反へりて蚊帳に映りき 姉川素枝子

ピースのジグソーパズル 藤田英輔☆
身近で幼い子と接しているようだ。幼児の様子を温かく捉えた歌が多い。愛情に溢れた目を通して見ているからだろう。

来年のことはともかく秋晴れの山の畑に今日引く大根 佐藤幸子
先のことは考えても仕方がない。それよりも今の時間を大切に思う姿勢がみえる。秋晴れの畑で大根を抜く。これも大切な「今」であろう。

庭の木の囲ひをしたる小春日に男結びの兄を思ひぬ 井上鈴子
庭木の冬囲いをする小春日。男結びで作業していた亡きお兄様の姿が浮かんできた。心の拠り所だったお兄様であろう。何かにつけて思い出が蘇るようだ。寂しさが伝わってくる。

干し柿の三週間後の仕上がり五歳の孫は今かと待ちおり 塚本節子☆
前の歌に蜂屋柿を吊したとある。大きな柿なので、立派な干し柿ができそうだ。お孫さんが柿を見上げて出来上がりを待っている。待ちきれない様子が目に

二月集 中村 哲也
間違へて炊きたる三合仏へも大盛りとなる今日のお供は 梶尾 栄子
十年ぶりに会う友皴や白髪増え会話となれば 山崎 猛☆
げき飛ばしあう 四日振り波打つように菊咲きて 高藤 朱美☆
えくれたり 扇形の雌雄異株の落ち葉踏み黄に染まりいる 二歳児の秋 藤田 英輔☆
一位の樹に鴨遊ぶ立冬の陽の柔らかく背中温もる 佐藤 幸子
木々の葉のすつかり落ちて道路より見ゆる山小屋兄建てし小屋 井上 鈴子
三つづつ紐で縛りて蜂屋柿十本吊しぬ小春日に 小春日に赤や黄色の葉裏より透かし見る空真つ青な空 羽田 孝輝
小春日は昼飯食はず時惜しみ冬の仕度に追はれ暮れゆく 羽田 孝輝
値下がりを待ってる間に句の過ぎ食へ損ねたりゆておおまさり 金子八重子☆

浮かび、笑みがこぼれる。

小春日は昼飯食はず時惜しみ冬の仕度に追はれ暮れゆく 羽田孝輝

厳しい冬が来る前に、懸命に冬仕度をしている。お昼も食はず時を惜しんで。冬を迎える準備の大切さを実感しているからだろう。それでも全部やりきれなかったのかも知れない。最後の「暮れゆく」に残念さが漂う。

小春日に雪囲ひする手を休め真つ青な空仰ぎ見る午後 同

小春日に慌ただしく雪囲いをする作者。冬の到来も近い。作業の手を休めて見上げれば真つ青な空。早く終わらせたいと焦る気持ちのなかに、空の青さが沁み込んでいくようだ。

値下がり待ってる間に句の過ぎ食へ損ねたりゆておおまさり 金子八重子☆
「おおまさり」は普通の二倍くらい大きい落花生のようだ。値が下がるまで待つのはよくあること。でも時期を逃してしまったのは残念。ゆてた「おおまさり」のおいしさは格別と聞く。

藤のテーブル

小林芳枝

在りし日を語りつつ捨ててゆく作業壁の時計は午後二時を過ぐ
若かりし義姉の作りし藤のテーブル立てて窓際に寄せられてをり
燃える物燃えない物と括られて運ばれてゆく義姉の品々
遺品整理済ませて帰る一月三日東の空に白き満月
楽しみて作りたるらむ藤の籠わが引き継ぎて蜜柑を入れる

●「現代短歌新聞二月号より転載

大山敏夫

小誌文庫判の『大友柳太郎歌集』『渚』鑑賞が間も無く手元に届くという状況で、後出しジャンケンのように貴重な情報の一つ舞込み、正直落ち込んでいる。拙著の「あとがき」で、歌集『渚』に關わる誤植誤記問題について少し触れたが(134〜137ページ)、その事情が分かったのである。

雑誌『時代映画』83号(昭和37年4月号)の「大友柳太郎研究」特集の中にあつた。口絵写真二ページに始まる31ページに及ぶ特集である。その中に誌面の変化を付けるように、枠囲みの記事が二つあり、そこに、大友柳太郎後援会が昭和30年に『渚』の改訂版ともいべき一冊を刊行したとある。時代は新仮名遣いなので、『渚』もそれに沿つてリメイクされるのは理にかなつてゐるが、その時に、著者

自身が個々の作品の制作年を入れて、更に気にかけていたのであろうか、作品の幾つかについて改作までなし、おそらくそれに伴い、歌集全体を再編、(舞台の頃に詠める)と(映画に入りてより)の二つにして配列までも変更した(たぶん?) ようで、なぜか歌集名までも「柳」

に変えてしまつたのであつた。それを伝えるのが左画像。

この事実を受けて、その後援会が主となり後年『大友柳太郎快伝』を監修するわけだから、その中に編集された歌集『渚』抜粋歌のすべては、この「柳」を基にして掲載されていたことになる。

大友柳太郎歌集「柳」より

舞台の頃に詠める――

旅にやみて日もたけにけりこのあした
うす鏡のうすぐもりかも(昭六・三)

すき腹に唐もろこしのかぐわしき
焼く香の沁みぬ金沢の夜(昭七・八)

しめやかにきかましものを殊更に
道化と語る母のみことば(昭九・九)

秋の夜の野風呂に父の背を流し
流しつづ聴くその昔のこと(昭九・一〇)

腹へればトマトを喰ひて詩をかきし
二十歳の頃のなつかしき哉(昭二一・七)

去年の夏胸病む人をいくたびか
この峠越えて訪ね来りし(昭二一・一〇)

映画に入りてより――

スクリーンに動く貧しき吾が姿
じつと目をとち息をころすも

清水や遠く別れし人の名を
空しく描く楽焼の店(昭二三・一〇)

人みな希いなれども吾もまた
悔を残さぬ生活をしたし

戦友と壕を掘りつづ故里の
土の香りをふと想えり(昭一九・四)

故国の空の碧さが眼に沁みる
帰還の艦の岸につく朝(昭二一・五)

(これは、昭和三十年に大友柳太郎後援会より出版された歌集「柳」から選んだ作品である。)

ゆえに原歌集に照らすと誤植誤記だらけとなるのも頷ける。著者の行つたであろう行為は資料的にも興味深いもので、特に改作がどういふ判断で行われ、結果的にどうなつたかなどは分かるものなら知りたいものである。今まで風の噂にも出てこなかつた改訂版歌集『柳』があつたこと、にも関わらず、後年この歌集か

何処かに捨てんとしたるこの思
空しくもちて旅より帰る(昭九・五)

母と二人手足のばして新しき
青蚊帳の香をしばし賞であり(昭九・七)

楽し楽し道行く人が誰一人われを
知らざり歌うたいつづ行く(昭二一・一〇)

映画に入りてより――

思師匠己先生を偲びて

幾山河へだてて住めどあたたかき
そのお情は胸に通い来(昭二一・七)

この秋をめづる心の湧く間なく
起きて働きつかれてねむる(昭二一・一〇)

――大友柳太郎歌集「柳」より――

ら作品を抜粋したことを公表せず、歌集『渚』からの選んだものだと思わせたところの問題の一つはあつたかと思う。さて上に二つ目の枠囲み記事画像を貼り付けたが、公開された二つの枠囲みのなかに取り上げられた作品には、ちよつと見ただけでも仮名遣いの混同、原歌集とも『大友柳太郎快伝』抜粋作品とも異なつてゐる箇所が幾つか判る。つまり文というものを転載する時が如何に難しいかを物語り、その作業のたびに誤植誤記載が発生し、一体どれが正しくどれが間違ひかが混乱し藪の中の状況になるのかと思われる。

情」が○となる。ざつと見て六箇所は多いのか少ないのか。抄出16首の内6箇所なのだ。校正作業的に言えば、ほぼ滅茶苦茶レベルだが、市販していたプロの作る雑誌でもこうなのである。

歌集『渚』のややこしきは増幅したが、戦後の落ち着いた時期に改訂版を刊行したことは意義深い。願わくは改訂版なのだから同じく『渚』として欲しかったが、今後は焦ることなくその歌集『柳』を探すことになるだろう。一体どんな本に仕上がつていたのだろうか。戦前の新興キネマ時代の後援会の骨折りで作られた歌集『渚』は、出版界の力が入つてゐるかと思われる出来栄えだつた。戦後の東映時代の後援会の手掛けた歌集はどうだったのか、是非とも手にしてみたいものと思つてゐる。「郎」時代の『渚』、「朗」時代の『柳』とも言える。旧仮名遣いの『渚』と新仮名遣いの『柳』でもある。

つらつら思うに、読者を混乱させる誤植、脱字、誤記載の見当たらぬ、美しい書籍であつてほしいものだ。

二月号 作品二評

井上 菅子

下山時に左右の樹々を見るゆとり赤き
実数多サルトロイバラ 益坂順子
頂上を目指す登り坂では、足元に注意
を払い緊張の連続だろう。登頂を果した
安堵感達成感に、サルトロイバラは一際
赤く見えたゆとりを具体的に示す。

何故に海を泳ぐか必死の熊が陸ままだ遠
き沖にて撃たれる 東 ミチ

熊の駆除には賛否両論のあるところ。
泳ぐ必死の熊と同じ状況なら人間も必死
に泳ぐだろう。抵抗できない者を撃つ非
道さへの怒りと哀れに共感する。

改めて礼を言ふこと適ひたり心足らひ
ぬ小春日の午後 松居光子

転んだ時助けてくれた人への礼も。当
座はそこそこの挨拶で済ませたが、きち
んと礼を述べて安心をしたという、誠実
な人柄の見える歌。

「帰らない」「亡くなったよ」今日も
又悦子さんと姉は従兄を言ってる

藤田夏見☆

上の句の会話は毎日言っている様子。
何度聞いても帰らない夫を待つ妻。認知
症を抱える家族の苦悩を、会話体で実体
を表現した。

バッテリーを替えて走行距離のびて用足
す範囲広がるセニアカー 児玉孝子☆
バッテリーを替えて優秀さを増すセニ
アカー。「走行距離のびて」は、うれし
い気持を明確に表した。

樹木にも寿命があることまざまざと見せ
てわが家の松は枯れたり 小嶋知葉☆
「松樹千年翠」といわれても、天候や
病害虫で松も枯れる。松は容易く枯れな
いと思っていたのに驚きと無念がある。

立冬の朝の垣根に返り花薄桃色の朝顔
二つ 奥山清子

二〇二五年の立冬は十一月七日。朝顔
はすっかり枯れているはずなのに、二つ
咲いていた。驚きは薄桃色を殊更美しく
見せたに違いない。

冬支度早目にはじめ大根掘り洗ふ水道
の水暖かし 水澤タカ子

「おほね」と古称で詠んだところが、

この歌では魅力になっている。水道の水
が暖かいのも季節感の表れである。

食材の在庫なくなり買物を孫に頼みぬ
未来の予習と 加藤富美子☆
「未来の予習」は何歳の孫かと想像し
てみたが、頼める孫の存在は大きい。や
はり結句が心に残った。

値引き札の付きたるケーキふたつ買ふ
年金暮しのプチ贅沢の 津田美知子
値引き札と言いながら、上の句は実に
微笑ましい。年金暮しの約しさを逆手に
取って、歌は豊かな彩りと肉付きがある。

廃墟の小屋の屋根走りゆくテンを見る
小動物がこの頃増えて 松崎みき子
細身に俊敏なテン。黄金色の美しい毛
並と廃墟の小屋は絵になる。小動物が増
えても害がなければ美しいテンは歓迎。

終活に収集の器処分して志野焼の皿ひ
とつ求めぬ 井出裕子
終活に処分して減らしたのに、志野焼
の皿を見たらまた欲しくなり買ってしまった。
焼物好きの心情がよくわかる。

二月号 作品二評

江波戸 愛子

急登の疲れ忘るる頂に笑顔並びていつ
ものポーズ 益坂順子

急斜面の登山道を登るのはかなりの時
間と体力がいるらしい。登りおえて着い
た頂上からの眺望を楽しみ、記念の写
真を撮っている笑顔がみえるようだ。い
つものポーズはどんなポーズだろうか。

庭の木に吊す干し柿の経過よしカラス
のことなど頭に無くて 東 ミチ

庭の柿を吊るして、干し柿の経過よし
と楽しみにしていたのに、まさかカラス
の被害にあうとは・・・作者の嘆きが聞
こえてくるようだ。

病院の自動支払機に差し込みたるカー
ドの番号わからずなりぬ 松居光子

カードでの支払いが便利だがいざとい
う時に番号が浮かばないことがある、筆
者は番号を書いた紙をひそかに持ち歩い
ていたが、先日番号の要らない新しいカ
ードが送られてきた。

森クラブ十人揃ひ忘年会自然大好き仲
間大好き 山本述子

森林などをめぐりあるく会なのだろう
か。息の合った仲間たちと一緒に行動で
きる喜びをリズムよく詠んで、読む側
も楽しくなる。

向い席の幼な子の目に吸い込まれ思わ
ず手を振り笑顔を返す 立石節子☆
幼い子は目が合うとそらさずにじっと
見つめていることがあるが作者はその目
に吸い込まれたと詠み笑顔を返したと詠
む、幼子との短い交流が微笑ましい。

僅かなるさつま芋掘り為しくれる息子
夫婦に加わるひと時 児玉孝子☆
息子さんご夫婦と一緒に話しながらさ
つま芋を掘る楽しさと感謝の心が伝わる。

樹木にも寿命があることまざまざと見せ
てわが家の松は枯れたり 小嶋知葉☆
伐採し残りたる松の丸太三本並べて家
の玄関に置く 同

長い年月を共に過ごしてきた庭の松を
伐りその残りの幹三本を並べて残して置
く家族の松への思いが優しい。

隣人の三人寄りて「遊山会」おうなは
語る恋の思ひ出 奥山清子

気の合う隣人の集まりではいろいろな
話が出てくる、今日はおうなの恋の思
い出を聴いている。なんでも話せる友
が近くにいるよろこびを詠む。

一週間のインフルエンザ完治して職場
のスタッフ「お帰りなさい」と 加藤富子☆
猛威をふるうインフルエンザに罹患し
て大変な思いをした作者の復帰を「お帰
りなさい」と迎えてくれた職場のスタッ
フの温かさに感謝の気持ちがあったわる。

村山の広大な景を将来に繋ぎたし春の
田んぼと秋の稲穂と 野口秀子
作者のふるさとへの想いがつよく伝わ
る歌であり、多くの人が頷く歌である。

旅に出るいつも座席は窓側で富士山見
える恵那山見える 首藤文江☆
富士山は日本の象徴であり、恵那山は

天照大神の膺の緒を埋めたという伝説に
由来する名を持つ山であり、窓側に席を
取る気持ちがよく判る。

作品二

小林 芳枝 東京

窓外の薄紅弁慶咲きそめて二月半ばの日差し明るむ
強歩を休み乾布摩擦をするといふ師に晩年の歌ありて読む
急激に日ざし弱まり昼過ぎの部屋寒くなる立ち上がるとき
連休に泊まりに来るといふ孫の短きメールまた読みかへす
手鏡に顔近寄せて引くライン左の眉に右を合はせて
四十七年の部屋悉く整理して息子の家にゆくといふ友は
三時間余り冬日に干したから叩いて取り込む布団いちまい

梶尾 栄子 兵庫

球根の眠る土の上雑草は陸月の光に芽を出しきたる
風花の舞ふも薄日の射しくればマフラーに顔包みて歩く
発表会の写真残るも今はもう置物となる娘のピアノ
ガムを噛むわが口に触れ幼児は手話のごとくに己が口指す
とんど焼き固める人らを赤く染め竹爆ずるたび悲鳴の上がる
道の辺の採りたて野菜の直売所若きが作ると評判を呼ぶ

飲み残る数多のサプリ生きたしと願ひたる夫の無念を思ふ
姪の家族六人どどつと突如来てミルクの匂ひ残して帰る

岩村 知康 長崎

街中に空家空地の目立つなり工事予定の表示もありて
高層のビルのあはひに仰ぎ見る冬の真昼の青ふかき空
ビル工事の屋に並み立つ起重機の上にある高き青空
県民の悲願などとして叫びつつ新幹線は開通されつ
「百年に一度の変革」標語にて駅周辺は再開発さる
長崎の港を埋め立て鉄道の敷設されたる明治時代に
茂吉在りて「船より鳴れる太笛」と歌詠みたるは長崎港なり
新しき駅舎に仰ぐ稲佐山そのいただきよ勇の歌碑よ
冬の日の南京櫨の並木には白き実の照る長崎の街

東 ミチ 青森

朝空に懸かる月あり正月六日今年最初の清しき眺め
町内の親しき人の息子なり阪神タイガース木浪聖也君
我の名を入れた色紙をいただきぬ「阪神タイガース背番号〇木浪聖也」
世話をして四年の過ぐる保護猫の呼べば返事す食べながら何か言ふ
選挙ポスター貼る場所つくる雪の山を掲示板サイズに四角く切りて
大雪に馴れてる筈の吾も友も心細さを嘆き合ふなり

佐藤 幸子 山形

病みて久しい義弟夫婦の顔を見むと空の旅せし昨年暮れに
空から見る街の姿や高速道路蠢く人等は蟻の群に似る

見えざる者が宙で呟く声とする「丸い地球だみなで守れよ」と

関西は薄味と聞きるしが伊丹空港の天井の味しつかり濃いめ

姪の押す車椅子に現るる義弟は顔小さくてことば少なき

「長生きしろ」と声掛くる兄に頷く弟の涙の面会も僅か二十分

「お義姉さんのこと覚えてゐます。」と手を握る認知症の義妹は童女となりて

安川 敏子 ☆ 埼玉

ゆらゆらと尾ヒレをゆらし鯉たちも日なたに集う白梅香る日

風雪の激しい北のニュース見る寒さの中でがんばる人等

赤々とストーブ燃えるすぐ横に転倒したり日曜日の夜

ケイタイで娘に知らせ一十九番無事に深夜の病院に着く

ベネチアの仮面カーニバルすばらしい街中行進と運河の火芸

美しい娘マリアのグループと中世の騎士団サンマルコ広場へ

翌日の天使の飛翔百メートルの塔から舞いながら広場に下りる

山本 述子 ☆ 神奈川

五分咲きの河津桜の並木道菜花も開き立春迎ふ

テレビ画像再三再四見入りを優雅で高度なフィギュアスケートの技

紫陽花の枯れたる枝に新芽無く慌てて水をたつぷり注ぐ

冬期にもグランドゴルフの競技為し楽しめたるは有難かりき

点数を気にする程の技もなく参加のみにて月日過ぎたり

この頃は長距離打にも力込めホールインワンに気合を入れる

松居 光子 三重

番地を書き忘れたる年賀状松の内過ぎて戻り来たりぬ

封筒に戻りたる賀状と詫び状を入れて再び投函をせり

当選の二年連続一枚も無し年賀葉書の楽しみなれど

残りたる正月用の銀杏を炊き込みご飯で再び味はふ

もちもちとした食感と仄かな苦味つややかな黄の銀杏ご飯

寒波居座る睦月二十六日けふは「風呂の日」長湯たのしむ

卯嶋 貴子 ☆ 東京

往復に五千歩かかる歯科医院週に一回一年通う

二月には陽ざしが日々に伸びてきて心も軽く買物に出る

塀の上にふんわりと雪が積もりいて久しぶりの雪景色見る

加藤 富子 ☆ 栃木

悠君の乗り換え指南で両国駅へ集合時間にピタリと到着

歓声が怒涛のように湧き上がる満員御礼の両国国技館

各々の鼻肩の力士の名を呼びて一挙一動に館内どよめく

勝ち星を連ねて強し閑取に拍手声援ウォーとひびく
懸賞旗にドラマの女優の名もありて土俵の上をゆっくり廻る
国技館の椅子は狭くて窮屈に蹴上げの高く老いには厳し

藤田 夏 見☆ 広島

挿木にて隙間なく植え水遣りは日課なりしよ従兄の妻の
たちねの古い母を待つ籠る子に帰れぬこと告ぐアルツハイマーと
施設への入所の意味は理解せず会うたびに聞く母の帰りを
ひとり住む従兄の息子はレシートを日々重ね置くわれの行くまで
軽トラックに三台運ぶ庭の木々夫と伐りたる従兄の家の
「この次は鍬と箒を持ち来る」と荒れ庭見つつ夫のプラン

水 澤 タカ子 山形

兄ふたり戦死のあとを継ぎくれし妹の入院に急ぎ会ひに行く
咽に物つまらせ脳を痛めしとふ会へばかすかに「ありがたう」のみ
転院し明幸園に移りしも目を閉ぢるまま息つくばかり
水飲ますのみにてわづか存らへど安らかなりてこの世を去りけり
父と母を在宅介護してくれし妹よただ感謝あるのみ
骨を拾ひに立つも体のよろめきぬ涙ふきつつ足元みつむ
ほつほつと蠟梅咲きそめ匂ひ出づ居間にやうやく癒やされてゆく
秋蒔きし人参わづか地に残りゐて雪をかぶれば甘味増しをり

藤田 英 輔☆ 高知

陽のさしたタライに氷のきらめいて季節を分ける今日は節分
干上がりて岩肌さらす渇水の貯水率ゼロはダムの疵跡
ひと晩中降雨の有りて水源に三パーセントの増加の報せ
旧き巢は其のまま枝の中に在りポツリと赤き実の残りいて
帰り道アオキの赤き実を拾うポケットに入れ「ママにあげる」と
手をつなぎ言葉を拾う帰り道オヤツや本やこれからのこと

立石 節 子☆ 東京

雪積もる枝にかすかに見え隠れ紅梅の色鮮やかになる
赤いそりに山盛り積みし雪解けて泥のみ残る庭の日向に
夫逝きて早二十年過ぎしたり二月八日は結婚記念日
春待ちて菜花を茹でる夕餉にも雪降り積もるニュースのありぬ

奥山 清子 山形

空仰ぎ舞ひくる初雪手に受くる師走四日のまだ明けぬ朝
妹と「セドリックの歌」声合はせ歌ひぬ遠き日の母の子守うた
住込みの若衆戦にとられ征き生家のかたち崩れはじむる
雪囲ひしたる軒端にはこべ萌え七草粥を作りたる朝
利用者の憩ひの時の手伝ひに書道教室二十年務む
日赤より金色有功賞を賜りて親より受けし健康に感謝す

ふるさとの山を仰げば遠き日の悲しき想い脳裏に浮かぶ
陽光を浴びる深紅のシクラメン明日の希望を思いて水遣る
年末に妻が骨折したるより老々介護の身と友の言う
パスワード使う世になり不安なりネットログイン全てに使う
パスワード4桁の番号決めたるも8桁以上英数記号入れよと
セキュリティ不安になれば指示通りするも当然数が増え行く
大量に個人情報流出を知れば先行き不安になるなり
冬季五輪若き選手の活躍に我が家の中も活気付きたり

野 口 秀 子 山形

二十歳となる孫娘より東京からスマホに届く誕生日祝ひ
長年の新聞講師変はりゆくさびしきことよ師は高齢にて
密やかにしな垂れて咲くセロジネの二本白く窓外は雪
長兄の入院したる三日目に個室に移るとは胸騒ぎ覚ゆ
義姉と共に兄に面会す肺気腫で酸素吸入し一生懸命に話す
子供らのみんな働いた時代あり自転車は荷物運ぶために買ひて

井 上 鈴 子 山形

左手首の大きな包帯横になる夫の温き部屋外は雪降る
左手首の傷口庇ひ入浴する夫の体を洗ふ夜な夜な

退院の夫の顔見に寒鱈と啓翁桜もち次男帰省す
窓一面雪が貼りつき花のやう冷えこむ厨に暖房入るる
氷点下の朝毎赤赤薪ストーブ義兄が姉に残したる薪
大雪の畑の土に眠るらむ義兄と姉が植ゑし大蒜

羽 田 孝 輝 山形

カレンダー下一段がないだけで近づく春を感じる如月
降る雪のなか平等に化粧せり畑も田んぼもみな同じ白
ピアスなし金髪もなしメダリストに好感覚ゆスノーボーダー
夕刻は日足伸ぶるを感じずれどまだまだ朝は暗いし寒い
在りし日はわれを支へし友逝けり今日見送りに骨を拾ひぬ
猫たちは炬燵の上で外眺む寒さうだなど顔見合はせて
去年の秋共に古稀を祝ひたる旧友逝くをラインは告げる

井 出 裕 子 静岡

固定電話詐欺に注意をする為に解約せむか迷ふこの頃
一人居の夜の入浴避けむかと思へど習慣変へるは難し
たはむれに友と約束す終活に「一日一捨」実践し合ふを
捨つる物メールで報告するを決む怠け心を互ひに知れば
一人居の友は同居の犬のためバスデーケーキを注文するとふ
犬用のケーキは高しと嘆けども電話に友の声弾みをり

作品二

我が漱石

新井 光 雄 ☆ 東京

中二の時師に勧められ読んだ本「こころ」を生涯どこかに引きずる
お定まり続けて読んだは「坊ちゃん」でマドンナという存在を知る
雑司ヶ谷の墓地の近くが下宿先真夜中遊んだ漱石の墓
少しばかり派手で立派な墓石は永井荷風と余りの違い
東大の本郷にある池の名は「三四郎池」二年付き合う
駒場には何ということパロディーか「一二郎池」やや目立たぬが
漱石の本籍なんと北海道どうやら徴兵逃れんとして
漱石の送籍問題知ったのは退職のまえ愕然とする
漱石は二千句以上の俳句詠み短歌はなぜかたったの九首

越 澤 太 朗 ☆ 茨城

畑の友が訪ねて来たり手土産に梅の蕾を一枝持ちて
縦列にきぬさやえんどう勢揃い百本立ちで春を待ちつつ
蕎麦刈りの跡の枯茎畑起しと種蒔き時を待つばかりなり
玄そばは保管倉庫に出荷待つ石臼引きと種を残して
春ちかき裏の林は静かなり木々の芽吹き気配漂う

雨降らずもうもうと立つ土煙大根の畝作りたる後に
春よ来いとみいちゃんの待つ童謡を口ずさみいる春の畑に

後 藤 恭 介 ☆ 茨城

あいにくの雨の予報の曇天なり佐原と潮来の車での旅
寒風に佐原の雑貨店散策し昭和の時代と小江戸を味わう
寒宵の北浦の湯は最上階対岸の灯の点々とともる
夕食は蟹食べ放題コースなり大満足の料理の数々
有吉佐和子の『青い壺』読む美の壺めぐる人間模様
マンガ『火の鳥』全十三巻読み終えて古代から未来へ視野を広げる
歌会に十名集うシニア達各作品の感想述べ合う
新宿で長男一家と忘年会五十階より都内一望す

松 田 忠 一 ☆ 山形

朝靄に霧氷の林清々し遠い山脈の新雪を背に
一年の使い古しも何もかも白く清しき初雪の景
暖冬の望み絶たるる寒の入り寒波襲来荒ぶる吹雪
旅の宿の窓の景色も外湯にも大寒の雪深々と降る
積む雪に潰されまいと暮らし居り薪ストーブの焔囲みつ
深き雪の景色なれども立春と聞けばこころに春風そよぐ
紀伊国へ嫁ぎし妹の贈りくる八朔食めば薫り立つ春

ぼたぼたと屋根の雪解け落つる音焦がれ待ちたる春の足音

長谷川 剛 山形

新春のコンサートで聴く円舞曲初めてきみと踊りしワルツ
懸命に雪掻きしたるこの疲れ老いの実感じわりと出づる
散髪を終へたるのちにいつも行く書店で手に取る断捨離の本
降る雪に雪掻き続く雪の町悴む指に息を吹きかけ
熱爛をちびりちびりと夕餉時妻の小言も肴に添へて
午後の四時雪の坂道散歩するチワワに引かれ飼主喘ぎつ
第一声舞ひ散る淡雪背せなに受け汗拭ひつつ握手を求む
北国の雪降り続く裏通り合図を交して車が行き交ふ

長 澤 千恵子☆ 山形

大寒の国政選挙雪国はおいできぼりか皆おろおろす
青い空時折見える色だけど籠もる私をほっこりさせる
寒い夜は温き湯湯婆で暖まり眠りの中へ少しづつ入る
鍋囲む冬の食卓寂しけれど家族の会話に何でも旨し
深深と雪降る中で人々は息を潜めて春を待ち侘ぶ
大寒に納豆漬の保存食甕に仕込みて御裾分けする
塵捨てに來れば小さな足跡あり獣の跡と思いつつ見る

今 野 澄 子 山形

表紙絵のシャインマスカット瑞瑞し翡翠の色は宝石のやう
穏やかな陽差しの中の枝枝に積もれる雪の丸くやさしく
春の陽に雪は眩しく輝きて雪融けの音ポトリポトリと
除雪後の夫に好物の牡蠣鍋を作らんとしてキッチンに立つ
早咲きの梅の開花の便り聞く立春過ぎの当地は吹雪
雪晴れてヘルメット姿の夫等は身振り手振りで屋根より挨拶
詠み足りぬ読むも未熟なわれなれど学びと仲間の樂しき歌会

河原木 光 子☆ 広島

カワセミに馴染みのあれど初に聞くヤマセミという蕎麦屋に入る
古民家の蕎麦屋に並ぶヤマセミの写真はここに來て客の撮りしもの
品切れの蕎麦の代わりにたのみたるハンバーグ定食に赤ワインソース
寛げる土地を探して庄原の古民家に来ての二十三年
古民家の主人の名前はわが夫と漢字違いの同じ名前よ
その姓はわれの旧姓なお聞けば女主人と同姓同名
木目込の干支作りいる六人の会話は弾む師走のひなか
検診のたびに縮まりくる背丈骨密度アップせよ踵落としす

兎 珠 純 子 山形

白髪にバンダナ巻きて微笑める奉仕に生きしわが師の遺影
「腹話術」と「語り」で人々を笑はせるトレードマークのバンダナは赤

「春風あかり」腹話術での名を持ちて九十路まで笑顔絶やさず
 腹話術使ひてわれは若き日に交通安全指導をしたる
 相棒の五歳の人形きゆうちゃんと習ひしあかり師の腹話術の技
 籠りるる年上の友を訪ねきて顔見合はせて歌ふ懐メロ
 冬道で前の車のナンバーの25-25を見て口角上がる
 寒中に晴れたる今日は裏山に猿五匹みて木の皮を食む

鈴木裕 子 ☆ 千葉

立春のあとに大雪寒いけど春が近いと思えてうれし
 霜を踏み音をたしかめ通勤路朝の寒さが少しほどける
 骨折にも入院拒み続けいる母の言い分猫が大事と
 母のため選びて送る簡単に食べられるものレトルト食品
 母からの「助かったよ」の連絡にほっとする夜小さな安心
 新宿の末廣亭で落語聞きただ笑うだけの夜を楽しむ
 手荒れより手入れが大事と同僚がわが手の甲にクリームを塗る

■ 訃報

古い会員のお一人、富田眞紀恵氏は、去る
 一月三十日に脳溢血によって永眠されました

た。富田氏は昭和昭和五十七年十月に当時の
 富山支部の紹介にて入会され、平成二十三年
 に冬雷叢書第93篇『季の約束』（短歌研究社）
 があります。心より哀悼の意を表します。
 小誌では七月号をその追悼の号と致したく

皆様よりのご寄稿をお待ちします。故人に關
 わる思い出等、またその遺された作品に対す
 る思い出等お寄せ下さい。
 ● 締切 五月十五日
 ● 大山宛にお願いします。
 〈編集室〉

二月号 十首選

作品一 石渡 静夫

霜が降る予報を見れば青けれどトマトの収穫
 家族でなしぬ 正田フミエ ☆
 吾の元氣と残りの時間の限界を病みてしみじ
 み思うこの頃 斉藤トミ子 ☆
 ひとり居は惚けると子等に脅かされ週に三日
 のデイケアに通う 田中 祐子 ☆
 掃除ロボ近くに来て知らぬ顔そんな時代に
 今ではなりぬ 浜田はるみ ☆
 アザレアは留守の間を守られて枯れずに長く
 花を保ちぬ 松中 賀代 ☆
 六角堂の岩洗いゆく波しぶき天心と同じ太平
 洋を見る 本郷 歌子 ☆
 遠隔のスマホで吾の動行を娘は見る背筋の
 ばさそう 永光 徳子 ☆
 小春日のつづく庭にて忙しなきあまたの蟻を
 踏むこと勿れ 大塚 照美
 ブランドとブレント米の味値段一文字だけの
 違ひにあらず 鈴木 計子
 バス道の曲がり角まで幾たびか振り向きたれ
 ば弟手を上ぐ 西村 邦子

作品二 大塚 亮子

一時的な記憶障害だったのか認知症が胸を過
 りぬ 松居 光子
 人間と利口なカラスの知恵くらべえさのない
 冬は真剣勝負 安川 敏子 ☆
 罪悪感心の隅に抱きゆく従兄の妻の入所計画
 藤田 夏見 ☆
 樹木にも寿命があることまぎまぎと見せてわ
 が家の松は枯れたり 小嶋 知葉 ☆
 夫の建てし八寸角の大黒柱地震の時もわれを
 守らむ 奥山 清子
 値引き札の付きたるケーキふたつ買ふ年金暮
 しのプチ贅沢の 津田美知子
 村山の広大な景を将来に繋ぎたし春の田んぼ
 と秋の稲穂と 野口 秀子
 町なかの並木も山も色づきて対馬の島の秋闊
 くるなり 岩村 知康
 一歩ごと落ち葉踏むこの心地良き朝焼けの空
 に心が弾む 首藤 文江 ☆
 求めたる志野焼の皿に煮物盛り夕餉の卓が少
 し華やぐ 井出 裕子

作品三 天野 克彦

あやとりのからんだひもを手渡してほどいて
 くれとせがむ園児ら 片桐美穂子 ☆
 歌誌経営の難しさ語る編集長の大会挨拶心に
 沁みる 後藤 恭介 ☆
 農の手はまだまだ動く十本の指グーチョキ
 パーを繰り返しており 越澤 太朗 ☆
 大根の葉を切り落とし畑土を分厚くかける越
 冬大根 長谷川 剛
 雪かぶる細き大根抜きとりて納豆おろし朝飯
 とする 長澤千恵子
 亡き友の呉れし絵手紙見詰めつつコスモス微
 かに揺れる気がする 今野 澄子
 よみがえる「新日本紀行」視聴する画面に滲
 む昭和のなつかし 松田 忠一 ☆
 若きころは関心持てず避けをりし郷土史を今
 楽しく学ぶ 和田 妙子
 岩場より足の上がらず立ち止まり山頂目指す
 は断念したり 川原木光子 ☆
 カンボジアの栄枯を見守りガジュマルの根に
 抱かれてひそむ石像 鈴木 裕子 ☆

二月号 作品三評

山本 三男

あやとりのからんだひもを手渡してほ
どいてくれとせがむ園児ら

片桐美穂子☆

ひらがなの多さが効的的で、なぜか
ほっとする作品です。今でも子供達の間
であやとりが行われているのですね。あ
やとりは江戸時代には行われていた、世
界共通の伝承遊びのようです。この園児
らが大人になる頃にも、あやとりが引き
継がれてもらいたいものです。

一仏像一冊とする写真集三十仏ほどモ
ノクロが良し 新井光雄☆

結句に作者の思いが述べられていて、
この写真集の良さが伝わってきます。現
在は昔のモノクロの映画がAIの補正に
よってカラーで見られる時代になりました
が、モノクロにはモノクロの良さがある
のでしょうか。

「べらぼう」のテレビドラマで江戸を
知る出版業界と幕府の圧力

後藤恭介☆

NHKの大河ドラマ「べらぼう」は江
戸時代の出版者の葛屋重三郎を主人公に
したのですが、江戸幕府の圧力につい
ても解りやすい内容になっていました。

筆者はこのドラマで、京伝が「心学早染
草」を書いた背景も理解できました。

わが命この世に生きてるありがたさ感
謝感謝の日々を送らん 越澤太郎☆

作者の思いがストレートに表現されて
います。短歌は揺れ動く心のその時々
の思いを詠むものですが、このような思い
を維持して行けたら良いですね。

炬燵にて転た寝するは至福にてテレビ
の音を子守歌とす 長澤千恵子

炬燵でテレビを観ながら思わず転た寝
をしてしまったのでしょうか。筆者もよく
経験することですが、作者はそれを至福
と捉えていて、達観したような思いを感
じました。

窓開けて初積雪は十センチ雪との戦ひ
本番となる 今野澄子

雪国の作者ならではの作品です。「雪と

の戦ひ」という表現に、作者の繰り返し
て来た経験からの、これから始まる冬の
厳しさに対する覚悟を感じました。

若きころは関心持てず避けをりし郷土
史を今楽しく学ぶ 和田妙子

郷土史をに対する年齢による変化が感
じられる作品です。若いころは郷土史に
関心を持てなかったのも分かるような気
もします。年齢を重ね、今は楽しく学ぶ
境地になったのでしょうか。

想像の百倍に感じるしんどさに山頂登
頂不安のよぎる 河原木光子☆

百倍というややオーバー気味な表現が
活きている作品です。漢詩には「白髪三
千丈」のような実際にはありえない表現
がみられますが、しんどさを表わすのに
はこの位な表現がよいのでしょうか。

午前五時明けきらぬ空街灯と同じくら
いに照らす満月 鈴木裕子☆

人工的に作られた街灯と自然に存在す
る満月の明るさへの視点が見事です。規
則正しく時間は流れ、これから人々の営
みが始まるのでしょうか。

二月号 作品三評

橘 美千代

あやとりのからんだひもを手渡してほ
どいてくれとせがむ園児ら

片桐美穂子☆

幼児との心暖まる交流がやわらかく情
緒豊かに歌われている。一句目、二句目
と四句目のひらがなのみの表記が幼さと
優しさを漂わせて。解いてとせがむとこ
ろがいかに幼児らしく愛らしい。

木の間より見え隠れする烏瓜風に揺ら
れて紅のちらちら 越澤太郎☆

真正面からすっきり見えるよりも木の
間に見え隠れする様に心惹かれる。熟し
た烏瓜の実の赤色が木の間にちらちらす
る様は何かの合図のようでもあり。作者
はしばし目が釘付けになった。

凜として夜空に浮かぶコールドムーン
影を踏みつつ帰りを急ぐ 長谷川 剛

一首全体流れるように破綻なく歌われ
ていて巧みだ。コールドムーンとは12月
の満月。和名は寒月という。ちなみに昨

年はスーパームーンであった。高空に明

るく美しく輝いていた。下の句「影を踏
みつつ」に作者の思いが溢れて。

キッチンにはシャコバサポテン華やか
に夕餉のおでん沸沸と煮ゆ 今野澄子

一見関連性の薄いかのような上の句と
下の句を衝突させて不思議な詩情を醸し
出している。修辭法の一つ。台所に置か
れたシャコバサポテンのピンク色が放射
状に広がる華やかさ。そんな中おでんの
煮える音と匂いが漂ってくる。平穏な日
常に潜むそこはかとない違和感。

あの頃は杭掛けはせ掛け天日干しノス
タルジツクな白秋の景 松田忠一☆

「よみがえる新日本紀行」はNHKBS
の番組である。昭和の頃の番組の再放送
である。筆者も見たいことがあるが本当に
懐かしい。稲架かけして稲を天日干しし
ていたのは昭和の頃の風景。あたり
一面に稲の匂いが満ちていた。新潟県で
も今も見ることなくなった。稲架かけ
の仕方にも地方ごとの違いがあった。
こどもらの作文読みて心配す紙と鉛筆

不要となりて 和田妙子

最近では学校でタブレット端末を使っ
て授業をするらしい。文部科学省が推進し
ているとか。必然的に紙と鉛筆は不要に
なる。手書きをしなくなることに作者は
不安を抱く。筆者も同感だ。

岩場より足の上がら立ち止まり山頂
目指すは断念したり 河原木光子☆

初めて富士山登山に挑戦された作者。
夜行バスにて現地入りしその日の夜明け
前から登り始められた。しかし、こむら
返りのためやむ無く下山することに。一
首全体から山頂に辿り着けなかった無念
さが強く伝わってくる。

風たちて白きライムの花こぼれ蜜追う
鳥のひそと舞い来る 手賀椋子☆

一読して日本では無いエキゾチックな
情景がちくる素敵なお歌。作者の住むメ
ルボルンでの囁みである。蜜追う鳥は
ミツスイは花蜜食に適應した鳥でほとん
どの種がオーストラリア区に生息する
という。一首全体から立ち上る爽やかでロ
マンティックな香りに魅せられた。

■湯川攝子歌集

『時は移りて』

経済学研究者として生きてきて、退職後に始めた短歌、十年後の第一歌集発行である。身の回りというより日本、世界を背景にしてある感のある四二〇首。

著者に一番近いところと思われる風景。芝庭に立つ霜柱朝光にきらめき儂し早春のいろ

厄除けに植えたる終赤き実を三つ四つ結びぬクリスマス近し

国内外の風景。

華やかに新装なれる劇場のかげに碑のあり阿国歌舞伎の

三千年前の暮らしをそのままに保ちしボンペイ火山灰の奇跡

アマゾン地球の肺と呼ぶるるに森林破壊止むこともなし

NGOに同行して。グアテマラの小学校で

は、野の花のブーケで迎えられた。

次々と姿勢を変えて試してみるすべり台の子らちよっぴり得意気

中学へ行きたいけれどと訴えきし男児の面差し胸に焼きつく

経済学者として。

半生をともしせし書の数々を若きに譲れば我は脱け殻

果てしなき枯野に紅きナナカマドわが行く道の標とも見ゆ

少しメルヘン。

森に響くコゲラのつつく木の音のモールス信号何のお話

歌集は終りに近付くにつけ、コロナや内戦、宇宙等に触れ、壁を除き、きずなを深めたい

という願いが濃くなってゆく。

感染者の数と獲得メダル数共に報ずるコロナ禍の五輪

手を洗う設備なき民三十億いかに処すべき感染症危機

最後に。

川向こうの学生時代の思い出は高層ビル群の影に沈みぬ

(ポトナム叢書第五四五篇 本阿弥書店刊)

■今井 聡歌集

『にんげんのかたち』

令和七年十一月十日発行、この二年間の二五九首を収めた第二歌集。他に評論集『ただごと歌百十首 奥村晃作のうた』がある。タイトルの、にんげんのかたち、とは何だろうという疑問のほどけるきっかけになるような歌から。

なにかよくわからぬものが集まつてわたしになつた なつた気がする

一人暮らしの様子。

味噌汁にごま油少したらしてもおいしいですとひとり囁く

最近はお酒を飲まないねと訊かるいつもの蕎麦屋の主にそつと

今井さん結婚はいいもんですよ さうかと応へキムチをつまむ

どうも思い人の居る様子。

真剣に君を想ふは一日のあひだに五分とけふ決めたれど

あひたくて居てもみられぬそのくらゐ渴ける方が互みによいか

何十年たつても鮪は好物だけど。

うつくしく照らされれど水族を閉ぢ込

めて春の水槽かなし

泳ぐことやめればわたし死にますよわたし死にますよ昏い眼で

著者の姿が見える。受話器持つ右手ほどよくゆるみたり昔は固くにぎりしものを

迫られて訊かれ任せられへる・らるVのおほき日なりとデスクに戻る

小手毬の花見ぬことのなにかしらころもの憂く夏へ入りゆく

(コスモス叢書第1267篇 六花書林刊)

■岡田郁子歌集

『アスクレピオスの杖』

令和七年十一月十日発行の第一歌集、四〇〇首を収めている。「スカレットの会」所属。著者は蛇遺座、医神のアスクレピオスの持つ杖に巻きつく蛇とのつながりある親しみにタイトルとした。歌集全般に自分の生き方に関する自問が感じられる。巻末になると自由に行動する姿が見られる。

朗らかに眠ればあまり見ない夢か。

踏み出せば落ちてしまはむ切崖の無限に冥き垂直のゆめ

「君」となんだかちぐはぐ。

染まらぬ君染められぬわれの向かひ合ふ夕餉に並ぶ沈黙を食む

月は年に三センチほど離れゆくどふ隔たるばかり君との距離も

ひもすがら蝶となりて潜みみつ潮目の変化を待ちつつ今を

世の中は。

競走馬の余生をまもる値なり「乗馬体験一人千円」

赤き尾を曳きて発ちゆく戦闘機に思ほゆいまだ戦下の人ら

危険知らず言葉も麻痺せり異常とか記録的とか多用される

能登はまた雪の予報か東京の心苦しきまでの冬晴れ

動き出した気配。

独り行動の楽しさおもひ描きつつ「ソロ活」ツアー申し込みたり

おひとり様ツアーは気遣ひ要らぬゆるゑ自我溢れくるストレスフリーに

おもしろい歌。

うすあまき母のレシピに太胡瓜とろろと炊く夕暮れ色に

(いりの舎刊)

■間瀬 敬著

歌集『九万里』を読む

大山敏夫

間瀬氏は一九八六年に「アララギ」に入会し、その廃刊以後は後継雑誌の一つ「短歌21世紀」の創刊に参加し、その後編集長も担当していたが、二〇二一年に退会する。そして事実上作歌中断中に、日本語教師であったことからウクライナからの戦争難民(避難民)のための日本語教室に四か月間携わった。自ずからその環境変化から作歌の再開となったようである。その経験は、

発表の場をもたないわたしは、新たな試みとして、個人誌を出すことにした。(略) 結社をやめて、ひとりになったこと、齢七十をすぎて構う気持ちがなくなつたためだろうか、ふと勇気が出て発刊したのである。

と「あとがき」に記している。個人誌は人磨の歌から「夕浪千鳥」と名付けられた。

歌集はその個人誌に発表された二年半ほどの作品を前半に配置している。日本語教室での経験が克明にうたわれている。

ロシア語にて互ひに語りあへるらしクラ
スにて知る彼らの現実
なにごとも一期一会といふけれど来週も
来ますと言はれてうれし

「おげんきで」最後の一語となりたるか
ことは教へてことばは悲し
服をつくる人また映画をつくるひと写真

家小説家登山家ここに
読みながら選ぶと、読み返すたびに異なる
作品にチェックを入れてしまうような表情の
濃い作品が続いている。最後にこれをあげる。

雲間よりひかりは海のうへに照りひとの
ころろを持たぬ波の音と
歌集収録は二〇一二年から二四年までの
十二年間の作品五七七首である。『エルベの
石』以後の第四歌集で、著者の六十代のほぼ
全作品となる後半の作品は「短歌21世紀」発
表時代となる。そこから佳品をあげる。

砂時計の砂のいろ見て待つ二分旅のつづ
きのやうな心に
夏草のうへ吹きまどふ風のゆくへ海鈍い
ろにさへぎりもなく
山のみづ手にむすび飲むありがたさ朝日
をうけてすみれ咲くみち
人は国をのがれ得ぬもの国は悪をのがれ

得ぬものあ人と悪
著者は近くの小公園のベンチで一人時間を
過ごすことが多かった時に、自分を指しての
「樹下散人」という言葉を得た。「散人」は無
用の人の意味であるものの、これを密かに自
分の号のように用いて来たと言ふ。その一首、
樹下散人つねのごとくにわがをれば鳩が
みつくて足もとに来る
をあげる。自然との接触、写真が素晴らしい。
山路でのすみれの花も良い。そして、沸々と
湧き起こるような人と国家を思う感慨が、読
む側の胸を打つ。
著者は五十代の頃か
ら腰を煩い、二度の手
術を受けたと言ふ。長
い距離を歩行できな
いので、自転車をよく使
う。

つらき脚はげまし
しはげまし坂をゆ
く霞む黄沙のそら
をみあげて
波だてるみづ浅き
まへ自転車をはき
てよぎりぬてな

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集、全国各地
を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・
歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。
●お申込みは、いりの傘まで
〒一五五〇〇三三 東京都世田谷区代沢五―三―五 シェルボ下北沢四〇三
電話 〇三六四二一八四二六 ファックス 〇三六四二一八五二六
メール chunpon@rinostaka.com

短歌総合紙・月刊 年間定期購読6000円(税・送料込)

うた新聞

おかげさまで創刊14周年!

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集、全国各地
を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・
歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。
●お申込みは、いりの傘まで
〒一五五〇〇三三 東京都世田谷区代沢五―三―五 シェルボ下北沢四〇三
電話 〇三六四二一八四二六 ファックス 〇三六四二一八五二六
メール chunpon@rinostaka.com

●「うた新聞」二月号より転載

やけに寒いひとく躰にこたへるな巢穴のや
うな室をあため
子が唯一買ひくれし温風暖房器夏は冷風器
かたはらに置く
あはあはとあはにありたく衣類など不要な
のにまたも呉るるひとあり
黄ばみたる朝の空のもと風荒れて大樹の騒
ぎ窓に見てゐる
黄ばみたる窓のそと黄砂飛ぶらむか抱ふる



男の厨歌

大山 敏夫

濯ぎもの部屋干しにせむ
下着などのタイシンクで捨ててのかわか
らぬままに室内に用る
雲厚き下は空の黄ばむ空地表には走る
渦巻く風が
このところ専らとこの厨歌キッチンに入
りて抜け出せずをり
冷蔵庫の野菜肉類点検し切らぬやうに腐

食ひ残す釜の冷飯すくひあげさつとチャ
ーハンわが唇舐め
名の付いた料理は作らぬと妻のいふ先づ名
を付ける俺とは違ふ

略歴 一九四七年十月、疎開地の千葉に生まれ、五歳の
時より東京に住み、二二代後半に埼玉に移転。中学三年
の時、作歌を始め、創刊間もない「冬雷」に入会して
至る。現在「冬雷」代表

島木赤彦研究会入会案内

- 島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。
- 会長 高橋 克
- 島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。
- そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。投稿などの機会が得られます。

●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局

江戸川大学 中島金太郎研究室内
〒270-0198

千葉県流山市駒木四七四
☎ 〇四(七二五二)〇六六一(代表)

第47回 全日本短歌大会 応募

作品 新作未発表に限る 二首一組とし何組でも可

応募料 二首一組で二千円

現金書留で作品を同封（小為替は無効です）

B4判四〇〇字詰原稿用紙

右半分に〒、住所、氏名（よみがな）年齢、電話番号

左半分に作品二首

二組以上応募の場合は一組ごととに前記の通り記載する

〒141-0022 東京都品川区東五反田一丁目十二番五 秀栄ビル二階

日本歌人クラブ全日本短歌大会係（Tel.03-3133-3801・2986）

令和八年六月三十日 必着

文部科学大臣賞・毎日新聞社賞・日本歌人クラブ賞・他

小池光・黒岩剛仁・今井千草・大西久美子・菊池裕・

佐田公子・高山邦男・山内頌子・森本平・和嶋勝利

毎日新聞紙上、及び入賞者への通知による

応募者へは大会終了後、作品集を送付します

日時 令和八年十月二十四日（土） 十三時

講演 高橋源一郎先生（応募者以外聴講料千円）

会場 明治神宮 参集殿 渋谷区代々木神園町一番二号

主催・日本歌人クラブ 後援・文化庁 毎日新聞社

◆創業1948年、時勢と共に77年！ 伝統と信頼の紙屋書店が出版する短歌関連書◆

【最新刊】**形容詞・形容動詞の短歌コレクション1000**



日本短歌協会監修

定価1430円（税別）

作集だけでなく地名と言葉とを形容詞・形容動詞の使い方の観点から、古今から現代に至る短歌作集1000冊や、漢語辞書中の歌人の名詞を調査、文法の手帳、作集に採入れただけでなく、鑑賞も楽しめられる一冊になりました。

固有名詞の短歌コレクション1000 日本短歌協会監修 定価1430円（税別）

恋の短歌コレクション1000 日本短歌協会監修 定価1430円（税別）

短歌用語辞典 増補新版 日本短歌協会監修 定価4400円（税別）

短歌文法入門 改訂新版 日本短歌協会監修 定価1980円（税別）

作集に必要な全書全冊を印刷全書用紙で印刷。アクリル板で表紙を保護し、裏紙は紙質のよい厚紙を使用し、表紙は厚紙を使用し、

編集 後記



▽春光煌めく季節、誌面にも新しい風が吹いた。冬雷と交流のある歌壇の方々からの作品を鑑賞できる「応接室」の設置、各欄批評のタイトル文字のデザイン変更、作品欄をページ19行として読みやすくしている。毎号楽しみながら学びたい。

▽『大友柳太郎歌集』が発行の運びとなったが著者の大山氏が得た最近の情報によると戦後になって『渚』の改訂版『柳』が発行されていたそう。補記を読んでそのことには驚いた。著者の大友短歌への考察は今後も続くのだろう。

▽冬雷ホームページでは最新号を常に更新掲載している。このほどQRコードを表紙裏に掲載したのでご利用いただければと思う。また『大友柳太郎歌集』を「Web冬雷」に掲載した。ぜひお楽しみいただきたい。(桜井美保子)

▽目次に、「応接室」としてご交流頂く歌壇の先輩、友人の方より新作五首を賜ることにした。一回目として、「新アララギ」所属の萩原千也氏にお願いした。

▽先月号より作品欄の見易化を進めているが、批評欄のタイトルデザインも少し変化させた。マスコミの新聞や雑誌等の活字の大型化が目立っているものの、あまり大きすぎると逆に読みづらくなる気もする。そこそここのところ考えたい。

▽インターネットとの付き合いは避けて通れぬところになった。そこでも新たな問題が次々押し寄せて対応に追われる。小誌のような小さな組織では自ずから限界があり、細部に於いては個々の利用者の注力に頼るしかない。くれぐれも馴染みのない広告サイトを「開かぬ」ように願う。

▽小誌も流行りのQRコードを取り入れ、奥付枠の中に配置した。スマホのカメラから取り込んで活用頂きたい。わざわざネットアドレスを打たずとも即刻に開ける。(大山敏夫)

▽新設された「応接室」第一回のお客様は萩原千也氏。お元気そうな写真と作品を拝見しながら遠い昔を思い出して懐かしい。

▽三月号から作品欄がページ19行組みになった。一行少なくなったので前号と較べてみてその違いに驚いている。行間にゆとりができたので活字が伸びやかにみえて読みやすい。作品評のタイトルなども新鮮な感じがして楽しくなる。レイアウトが変わるとページの雰囲気も明るくなるような感じがする。

▽編集長の『大友柳太郎歌集』が賞補記は三月号の別冊付録の後の新情報ということで驚いたが大友柳太郎は歌を大切にしていたのだと改めて感じている。(小林芳枝)

▽誤植訂正
2月号 P 67 後藤恭介氏の3首目
後援会↓講演会。

作者にお詫び致します。
▽御寄附御礼申し上げます。
桜井美保子・匿名一

冬雷規定・掲載用

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額(購読料を含む)次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
- *会費は原則として振替にて納入する事。
- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
- B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
- C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
- D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
- E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

投稿規定

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
 - 冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
 - ・担当 大山 敏夫
 - ・担当 桜井美保子
 - 作品一欄
 - ・担当 小林 芳枝
 - ・担当 桜井美保子
 - 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
 - ・担当 小林 芳枝
 - 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
 - 一、無料で添削に依る。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- △Eメールでの投稿案内▽
白地に一まずつべた打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
大山敏夫 tourai-ooyama@nifty.com
小林芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026年4月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株)ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ http://www.tourai.jp

頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向

冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
33	32	29	10	104
(0)	(+1)	(-1)	(-1)	(-1)

*上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。